
今日の文芸便り

逆叫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の文芸便り

【Nコード】

N9726E

【作者名】

逆叫

【あらすじ】

高校一年生の裾野君が入部した文芸部は、何からなにまでが全ての常識を覆す、コメディ満載の独走部だった！裾野君はこの環境を無事に生還することができるでしょうか？

初刊っ！（前書き）

これは学園コメディという部類に入るんですが、そのメインとなる文芸部入部までの経緯が意外と嵩んでしまいました。もし、入部してからがみたいんだ、という方は十一刊辺りから読み始めるのがいいと思います。伏線なんかはあんまり撒いてませんから、支障はないかと思えます……。

もちろん、ここから読んでくださる方がありがたいです。そちらの方が深く知ることができますから。

どちらか、お好みの方向でどうぞ！

初刊っ！

「ああれ。お前さ、文章書くの上手くなってるね？」

「はあ？なんだよいきなり。」

「ほら、絶対上手くなってるって。これ。俺の感覚から言ってさ。ほらほら。」

「……んじゃいつもどおりなんだな。」

「おい、なんだよそれ。せっかく褒めてやってんのに。」

「何でそんな態度でかいんだよ。少しは集中させてくれよ。終わってるからっていい気になりやがって……。」

裾野^{すその}はため息をついて、隣で終わりました顔でニヤニヤしている小森^{こもり}をじろりと睨んだ。おお、怖い怖い、と小森が視線を逸らす。

時間は既に六時をまわっている。裾野は未だに完成できていない原稿を映し出しているパソコンのディスプレイを睨みつける。文は稚拙だが、これに掛ける思いは誰にも負けていないと自負している。それがここに残っている理由でもある。

裾野と小森が入部志望するのは、蜀蔵^{しよくぞう}高校の文芸部だ。

実のところ、小森はその作品を書き上げて居ないのだが、家にパソコンがあるので、こうして大きな面を見ていられるのだ。きつと徹夜でもするに違いない。随分なお坊ちゃまだ。

裾野が学校のパソコン室を借りてこうして友人の視線を感じながらキーボードを叩いているのは、親が時代の変遷に乗ることができなかったことに由来する。家にパソコンが無いのだ。なんという時代錯誤だろうか。

「ら、ら……なんて読むんだこいつの名前。」

「楽^{らく}楽^{らく}だ。このくらい読めるだろう。」

「相変わらず変な名前使ってんなあ……。つてえヤベっ。」

小森がそこで小さく叫び声をあげると、裾野が座っている椅子と机の間に潜り込んだ。突然の行動に裾野は驚いて、身をよじる。

「ど、どうしたんだよ。」

「ははっ。こっつて許可とったやつしか入っちゃ駄目なんだよな？」

小森が困ったようにそう言った。裾野はそれを聞いてから、顔をあげて　合点がいった。

顧問の草薙くさなぎの姿があつたのである。

「どうだ、裾野順調に進んでるか？」

二年目だというこの若い教師は、会つて二時間というのに親しげに裾野に話し掛けてきた。その言葉には、他所他所しげな棘が含まれていなく、本当に親しみを持って話し掛けてきていることがありありと分かる。裾野はあまり彼と話したことはなかったものの、心の隅では彼を尊敬している節があつた。

「ええ、はい。あと少しで終わります。」

「そうかそうか。流石、我が部の新入生だけあるねえ。……ところでそこで季節外れの冬眠の準備をしている蝙蝠君こうもりはどうしたのかな？」

彼は、小森のことを蝙蝠と呼ぶ。単にこもりというのを擦もじっただけなのだが、そこそこ受けがいい。同級生のほとんどがこの名前を使う。

小森はギクリと体を震わせたが、すぐにあははと笑つて机の下からもそもそと姿を現した。

「あはは……。駄目ですか。やっぱり。」

「駄目ですねえ。やっぱり。」

そんな二人の短いやりとりを、裾野は椅子に座つて下から見上げるように見ていたが、どうもこの二人、似ている。

「と、いうわけだ、裾野。悪いが俺はここでゲームオーバーだ。

お前だけでも生き残つて、是非とも宝剣を我が物に」

「蝙蝠君。早くしないと宝剣の錆になるよ。」

「な、何い！裾野、こいつが宝剣をあぎやあああああああ！」

「それじゃ、頑張つてね。」

「は、はい……」

草薙は、本当に小森の首根っこを掴むと、そう裾野に励ましの言葉を入れて、小森を連れてパソコン室から出て行った。ちなみに、宝剣とかなんだのは小森が即行でうちあげたんだろう。ああやって物事のスケールを拡大するのが特異なんだあいつは。

裾野はため息をつくと、ディスプレイとにらめっこを再開した。

第二刊っ！

「お、終わった……。」

裾野は安定しない視界の中にあるディスプレイ上の原稿を見てそう呟いた。ようやく終わった。

時間を確かめようと、壁に掛けてある時計に視線をやると、二つの指針は垂直に交わっていた。

「もう九時か……。早く帰らないと。親父が心配する。」

心配される理由が、妹が悲しむからという理不尽極まりない理由だが、妹を泣かさせるのは鬼に一粒の豆を投げることに同義。ここは大人しくさっさと帰ることを念頭におく。

パソコン室のパソコンの電源が全て落ちていることを確認して、電気を全て落として鍵を閉める。

九時に学校に残っているのは、恐らく裾野ぐらいであろう。廊下の電気は全て落ちていて、おぞましいくらいの静寂に包まれている。自分の息遣いだけでなく、鼓動も明確に把握できるくらいだ。

誰も居ない職員室に鍵を返し、さあさっさと帰ろーと、一階にある下駄箱に足を運ぶ。

心に目隠しをして、極力なにも考えないように歩く。考えると、マイナス方面ばかり考えてしまうから。こういう時の裾野のネガティブさは常人の理解を超える。こうして心のスイッチを切るのも、その経験が積もって手に入れた苦勞の結晶である。

しかし、そんなことをしていても、現実には避けられないみたいだ。下駄箱までつくと、何かが聞こえてきた。ぎくりとして足を止める。背中に走る嫌な汗を感じて、体温がつーっと失せていくのが分かる。

（な、なんだ……）

近づいていくと、その音の招待が掴めてきた。人間の嗚咽のようだ。多分、女の。

（やややややややや、やべえってこれ……現実だよな？幻聴じゃないよな？）

そつとその嗚咽の音源へと近づいていく。それは人間の持つ概念が打ち碎かれると信じたくないことと、単に好奇心が働いたこともある。このまま帰ったら、想像上の靈魂に苛められそうだから。

「……………えぐっ……………ひぐっ」

そつと、下駄箱の端から覗くと、誰か、この高校の制服を着た女子が座り込んで泣いていた。

裾野の思考がフリーズする。月明かりに晒されたその姿は、正しく幽霊というか……………どうしましたか？と訊ねると、助けて〜と顔をあげ、なんとその顔がのつぺらぼ〜っ！という落ちが待って居そうで怖い。てか、のつぺらぼうモノの怪談で、そのあとその人どうなんだろうな……………。

と、今ごろきちんと思考は働いているじゃないか！と、気づいた裾野だった。

「だれ……………？」

そんなときに、その女子が嗚咽を止めて、顔を上げた。裾野はインパルスの早さで下駄箱に身を隠す。これだけの反射能力があったら、アメフトで世界に負けないのに。

（……………あの声どっかで……………。）

つか、早く帰らせてくださいまし。

第三刊っ！

その女子生徒……もしかしたらコスプレした変な奴かもしれないが、彼女は適確に裾野すそのの気配をかぎつけて、執拗に裾野の正体を暴こうと迫ってくる。裾野はその気圧に圧されて、脱兎のごとく逃げる。……もちろん、逃げる必要なんて、カレーに箸を用意するくらい無駄なのだが、裾野は逃げる。まだ、脳内ではのっぺらぼうがじやんけんしようよ、と言いながら迫ってくる光景がループしているのだ。高校生になってるのに情けないことこの上なし。

裾野は、行き止まりとなった壁にガンっと手をついた。正確には壁ではなく、講堂への扉なのだが行き止まりに代わりはない。

「あああああ……。」

後ろを振り向くと、その少女が……息を切らしながら走ってきた。暗がりによく分らないが、意外と小柄で、その細い腕で裾野を殺軽減すりや驚かすなんてもってのほかであろう。

「はあ……はあ……、何よ……いきなり逃げ出すこと……ないじゃない！」

彼女は全身全霊で肩で息をしつつ、途切れ途切れそう言って来た。裾野はその声を受けて初めて彼女を直視することができた。明らかにアウトドア派ではないだろう、その華奢きゃしゃな体。そして、傍に置いておいたら羨ましがられるような、端麗美麗秀麗……とにかく、そんな単語が似合うすりとした表情。今は疲労と怒りに歪んでいるが。

「……ああ……ビククリした……。」

「ビククリしたのは……こっちょ……！」

彼女が手を膝について、そう抗議の声を上げる。まあ、驚かされたのはお互い様だ。しかも、その驚きの後にこみ上げる感情（好奇心、恐怖）の凹凸が綺麗にはまって、こうしてお互い夜の学校の廊下を全力疾走する羽目になったわけである。

（まあ……人間で良かったわ。）

（……か、顔があつて良かった。）

否、どちらも恐怖が原動力だった。

呼吸が安定したところで、裾野は氣をとりなおす。彼女も大分落着いたようだ。

「んと……驚かせて悪かった。」

「……………別に。」

頭を掻き掻き、裾野がそう一応詫びてみると、彼女はフーンとそっぽを向いた。

裾野が彼女の脇をため息を吐きつつ通過すると、彼女は少し呆氣にとられたようにぱかんとしていたが、すぐに目に輝きを取り戻して裾野の後を追ってきた。

広さと走行時間に綺麗に比例して、走行距離も大分重なってしまった。裾野が常用している下駄箱は闇に包まれた廊下の遥か先だ。

「あんだ、こんな時間に何してたわけ？」

裾野はこんな静かな空間が好きだが、彼女はそうでもないらしい。痺れを切らしてそう訊いてきた。

「ん、パソコン室に用があつてな。家にパソコンがないから貸してもらつてたんだ。」

「へえ……………何してたの？」

「ん……………」

なんでそんなこと…………と口を開きかけた裾野の口が凍る。矛盾の答えともいえる視線を気づかないふりをしてかわすと、続けた。

「俺は文芸部志望なんだが、その投稿作品の執筆だ。」

「……………文芸部……………」

極力彼女の視線を受けないように裾野がそう言つと、彼女が不思議そうに呟いた。

そして。

「あんたも文芸志望なの。」

第四刊っ！

蜀蔵しゅくざう高校文芸部というのは、文芸部の中では吹奏楽部に次いで入部志望者数が多いのが特徴である。無論、それには理由があつて、それには四年前からの二年間に渡つて人気作家を三人も生み出したことに由来している。

実のところ、完全なる偶然だったのだが、『時代の先端に行く作家を吐き出す部活』と、雑誌に取り上げられてしまい、こうして大気になつてしまったのである。

しかし、その勢いが続いたのは一昨年まで。憤つて入つてきた部員の士気は深刻なほど落ち込み幽霊部員がどんどん増えていく。しかし希望者は増加の一途を辿っている。さて、どうしたものか。

そこで去年、ひねり出されたのが『希望制度』。どうやらあの顧問の草薙くさなぎ監修らしい。

それは単に志望者を募つて、何か適当な作品を投稿させて二年三年の先輩たちが読み評価して、良と判断されたら入るという、いわゆるオーディションシステムである。これもよつて、志望生徒数は変わらないものの、本当にやる気がある者だけを取り入れることができるらしい。

そして、この一年で蜀蔵高校の文芸部は、難関公立高校よりも入部が困難と、県内で有名になるほどになつてしまったのであった。

小さい頃から作家になることが夢だった裾野にとつて、この文芸部に入れるかどうか天下の分かれ目なのである。だから、この投稿作品には全てを賭ける。

二、三枚程度のショートショートであるが、内容は濃密。起承転結をハッキリとさせて読みやすいように一人称。伏線の拡散と回収を徹底的に行い、三分で読めるファンタジーといった感じである。ここまで本気を出したのはどれくらいぶりだろうか。

月明かりの下、先ほど遭遇した女子が裾野の自信作を読んでいる。裾野と同じ、文芸部入部志望の彼女、奈倉渚である。どこかで聞いたことがある名前だと思ったが、どうやら同じクラスらしい。互いに知らなかったのは、時代の流れだろうか。それとも時間の浅さだろうか。

街灯がちらほら見えるくらいで、革命的な明るさがなく人気のない道を歩いている。大阪が目的地だとしたら、中国を経由するくらいの遠まわしに、

「驚かせた罰としてあたしの家まで、付いてきて。」

と、いわれたので渋々付き合っている次第である。

ついでに、書き上げたのを見せろというので、読ませている次第でもある。

見慣れない風景が続き、どこだ、ここ。ちゃんと俺家まで帰れるのか？、と考えつつも、渚についていくような形で静寂に満ちた夜道を歩く。空を見上げると、分厚い二酸化炭素の層を突っ切って一等星の小さな明かりがちらほら見える。

そんな風に過ごしていると、ついと渚が顔を上げた。裾野は動悸がしてくるのを感じながら、訊ねてみる。

「どうだった。」

「……何か……個性が感じられない。型にはまってるみたい。」

失敗作であるオムレツを食べたシェフみたいにそう言った。無論、そんな評価を受けて、裾野もはいそうですか、読んでくれてありがとうー^^なんてことするはずがない。

「な……なんでだよ。」

でも、それしか言う事ができない。頭の中で、その小説の文を反芻させる。

「悪くはないわよ。どこかのコンクールでも賞は狙えると思う。でも、これじゃあ文芸部には入れないわよ。」

渚はそう言っ、歩く足以外を硬直させた裾野に原稿を返した。裾野は上の空でそれを受け取る。

彼女が言ったことは正しい。文章力が上がつてるとかなんだのと小森は言っていたが、文章の問題ではない。文章を求めるが末、物語が簡素なものになってしまった。

しかし、そんな偉そうな口をきくが、彼女だってまだ正式な文芸部員ではあるまい。

裾野はそう己に言い聞かせて、

「……これはちと平等じゃないんじゃないのか？」

と、彼女に申し立てた。

「え？」

彼女はきょとんとして言い返してきた。……なんだその唯我独尊というか、自分中心なかんがえ方は。

「なんで俺だけ読ませてそうやって言われて、お前はそんじゃさようならなんだよ。俺にもお前のやつ読ませろ。」

そう言つと、彼女は目を泳がせた、裾野はそれを見逃さない。

「……おい、でかい口いきいとしてそれはないだろう。」

「わ、分かったわよ！見せればいいんでしょ、見せれば！」

裾野が後姿を押すと、彼女は吹っ切れてそう言ってきた。背中にぶら下げたある鞆を手にとると中からA4の印刷用紙を取り出す。

「はい！ここで読まれるのは恥ずかしいから、家で読んでよね！」

そして、裾野に押し付けるようにそれを託すと……走っていつてしまった。なんだあれは？

そして……彼女が走っていった先を見ると。裾野の目的地でもある駅だった。

第五刊っ！

酒が入っていつも通りのテンションの高さの父親と、睡魔が侵入して軽く情緒不安定になっている妹をなんとか回避して、裾野は自分の部屋に潜り込んだ。

相変わらず、やつらの歓迎ははらわたを抉られるような、不快逆流に触れる節がある。

父親は年齢^{よわい}四十になる、平凡なサラリーマン。平凡……ってのは平凡だが、趣味として書きはじめた小説が、なんと入選してしまい、現在小説家兼リーマンという、なんとも多忙及び有意義な生活を送っている人生の成功者である。裾野が小説家に憧れたのも、それが影響している。

妹は六歳年下になる。今年で四年生。自称有意義に過ごす父親を見て育った故、大分正確が転げてしまった。どこをどう間違えたら、律儀な子がブラコンになってしまうのだろうか。あれがそのまま成長すると……、裾野はため息をつかざるをえない。

「はあ……。」

裾野は文字通りため息をついて、鞆を机の上に載せる。

「ああ、そうだ……。」

渚^{なぎさ}から受け取った原稿があつたはずだ。

そう思い当たって鞆をがさごそと漁って、例のA4の印刷紙を取り出す。

机の電気をつけて、その印刷された活字に目を走らせる。

(……………)

読み終わって、それを机の上に置く。

裾野は困っていた。どういう感想をつければいいのかよく分からない。いや、感想がないとかそういうわけではないのだ。読書感想文コンテストとかいうもので、優秀賞を貰った記憶がある。

ストーリーはなんとなく分かった。この39字詰め原稿に、上

手く配分されて書かれていた物語は良く分かった。そう……結末は奇想天外である。

だが……文章が稚拙なのだ。

どう稚拙か、まず語彙が少ない。使いまわしがうまくいっていない。それに話が突飛したり地団駄を踏んだりしている。いつのまにか登場人物が増えていく。

「なるほどな……。」

あの時の反応は、これだったのか、と裾野は納得する。しかし、それは裾野の感情に泥を塗りたくる結果となる。

彼女は自分の文章力の無さを自覚していたのだ。しかし、裾野はそうではなかった。自信を持っていた。しかし、それは文章の世界だけであって、世界観に脈動感が感じられない。装飾が綺麗だけで、役に立たない銃のような感じなのだ。

裾野はベッドに身を投じた。スプリングが軋みを上げる。

あの時泣いていたのは、これが原因だったのかも知れない……、と裾野はふと思った。自分の書きたいことが上手く表現できないというのは、なんとじれったくて後ろめたさを感じるものである。そんな己に嫌気がさし、自己嫌悪で自らを虐げていたのかもしれない。裾野は目を閉じた。光が瞼^{まぶた}によって遮断されて、視界が闇に堕ちる。

（このままじゃ本当に入部できないかもな……）

蜀蔵高校の文芸部の入部倍率は、県で一番良い高校の前期合格倍率を優に上回る。センスと、表現力が問われるこの入部試験は、興味本位での入部を受け付けていない。

（……興味本位。）

そうか……文章力が無かろうと、物語の構成力が無かろうと、情熱があれば入れる部活なのだ。高校入試とは違う。

それならば、全く希望が無いわけではない。それぞれ、いいところはあるのだ。それならば、震えるのではなく真っ直ぐに見据えてやろうじゃないか。

……と、考えたのはいいものの、その考えが彼の意識があつた内に作り出されたものかは、明日の彼のみぞ知ることである。

「……居た。おおい！奈倉！」

裾野は、教室の入り口前に張り付いていて、渚の姿を確認すると、そう呼びかけた。渚はびっくりと反応したが、裾野の姿を確認すると、機嫌が悪そうに彼に近づいていった。

「これ。」

裾野が、昨日読んだ原稿を差し出すと、渚は赤くなつてばつとそれを取り上げた。

「……わ、笑いたいのなら笑えばいいわよ。」

引きつった表情を浮かべて、渚がそう言った。本気でこの文章力のことを悩んでいるらしい。

「笑うもんか。話は面白かつたぞ。」

裾野がそう言うのと、渚はその歪んだ顔をみるうちに「嬉」の色に染めていく。純粹に褒めてもらえるのは嬉しいらしい。

「ほ、ほんとうに？」

「ああ。ストーリーは面白い。ショートショートの王道をついてる。」

裾野がそう言うのと、渚はついと視線を逸らした。裾野は機嫌を損ねたかと危惧したが、

「……。あんたのも型にはまってたけど、読み易かつたわよ。」

と褒め言葉が出てきたので面食らった。

「……そ、それはそれで嬉しいな。」

「……でも、物語はもうちょっとひねらないと。アニメ化とかしたとき、ファンからのクレームが酷いわよ、きつと。」

「ん……まあ、お前も文章をもうちつと見直したら、小説ファンからのクレームも減ると思うが……。」

「へ？」

そう裾野が言うと、渚はきよとした顔になった。

「え……って。どうした。」

「文章って……何？」

「は？……お前、文章が酷いのを気にして、昨日渡すのを渋ったんじゃない」

裾野はそこで口を噤んだ。渚が原稿を食い入るように読んでいる。そして。

「……あんたがおかしいのよ！」

「は？」

突然そう言い出した。

「あんたのはあんたのでおかしいのよ！これが普通なのよ！人の価値観勝手に押し付けないでよね！」

え、え、と、事情が呑みこめない裾野を尻目に、渚はそれだけ言う。と、裾野の脇を抜けて教室に入っていた。

一人教室の入り口に残された裾野は。彼女のイメージが崩壊して、自分の地位が元に戻ったことを実感していた。

第六刊っ！

どうやら渚^{なみぞう}は、自分の文章力の疎さに自覚を持っていないらしい。ただ、あのクオリティの高さ（良い意味でも悪い意味でも）で、あんなうじうじしていたのであれば、あれは相当のツワモノである。

合格率は五分ほどか。いくら文が豪を極めようとも、ストーリーが単純ではただの二流作品だ。それでもって、ストーリーが読者の裏の裏の真中を衝^つこうが、文章が小学生の読書感想文の様では、これまたただの二流作品である。互いに、入部率は熊と熊手で決闘したときの勝率ほどである。

裾野はじわりと背中中で汗が滲むのを感じた。背中と服の布地の間で即席の蒸し風呂が完成する。

「どうもー。これは先輩殿達がじっくりこつてり骨までしゃぶしゃぶと読み尽くして、厳密な審査をした後、明日の朝合格者の名前を校門に張り出すからね。きちんとチェックしておけよ」

「はあ……分かりました。」
妙にテンションの高い草薙^{くさなぎ}に原稿を渡すと、裾野は家路につくことにする。

今年で二回目となるこの蜀蔵^{しよくぞう}高校の文芸部入部選考会は、意外と世間からも注目されている。なにしろ、間違い（というの名の偶然）があつたにしろ二年間で三人の作家を生み出してしまったという事実は変わらない。それゆえ、一部のマスコミからも注目されているようだ。何しろ、入部テストをする部活なんてここくらいだし。

裾野が把握しているだけで、入部志望者は学年で六十名ほど居る。学年の生徒が三百人程度だから、この比率は異常である。そして、この中から五十五人が蹴り落とされる。そう、なんと五人しか残らないのだ。しかも五名というのは定員であるから、上位五人が入れるというわけでもない。完璧な審査制なのだ。そんな厳密体制なのに、それを一晩でやってしまうとは……ここの文芸部員はこの労

働者なのだろうか。

草薙と会ってきたせいで、昇降口は閑静を極めており、昨日のようにしんみりと連なった下駄箱が佇んでいるだけだった。裾野は疲労を込めたため息をついて、自分の靴を取ると地面に叩きつける。

「あ、あんた。」

と、思ったらそんな声が掛かる。

裾野がその声の方を向くと、渚がどこか自信に満ちたような顔で裾野を見据えていた。

「何だよ。待ってたのか。」

「ち、違うわよ。あたしも草薙に出してきたところ。」

そういつつも、校門から颯爽と登場さうそうしている。待っていたんだろ？。そうでなきゃここに居る意味がわからん。

「なんか自信あげじゃねえか。」

「当然でしょ。あんたはなんか読む目だけはあるそうなもの。」

裾野がその曇りの無い表情を見てそう言うと、渚は更に顔を光らせて言った。褒められているが褒められている気がしない。

「あんたはどうなのよ。自信は。」

「……どうだかな。五分位か……。」

よく考えてみると、この高校の文芸部に入ったところで、絶対作家デビューできると言うわけではない。単に偶然（間違い）が連鎖して起きてしまっただけなのだ。それ以外はただ他の高校と同じ、普通の文芸部である。

しかし、裾野は何故かこの文芸部に極度の憧れを抱いていた。何故だから知らないが、これは出版社に持ち込んだときに有利になりそうじゃないか？

「蜀蔵高校文芸部出身でス！」

というだけで原稿を見てくれるような……。ちなみに、今の世では新人賞を受賞してデビューするのが定石である。

「随分自信無さ気じゃないの。」

「ああ……ハッキリ言って無い。」

「なんでよ。」

「ん……？そりゃあ、お前が昨日言っただけに、俺のはストーリーが把握しやすいというか、単純単調稚拙じゃねえか。そんなんじやあなあ……。」

裾野は深く嘆息を背景にそう言う。雲ひとつ無い青空が皮肉めいて見える。

「ふうん……そんなんでねえ……。まあ、あんたが受からなくてもあたしにとっては関係ないからね。とりあえず、受かるように願っというてあげるわ。」

「なんか言ってること矛盾してないか。」

「そ、そんな事ないわよ！」

俺は自信が無いけど、こいつは自信満々。なんか対照的だな、俺たち。

なんて、考えてしまっている裾野がここに居たのであった。

第七刊っ！

これまた春らしいというか、夏に入りかけていることを精一杯表現している（まだ四月だが）カラッとした太陽が、裾野すそのの頭上を真っ青に染めている。赤ん坊が干切って放置したような雲が、適度な間隔で浮いている。

なんだこの変な緊張感は。下手すれば、高校入試の合格発表のときよりも緊張しているかもしれない。頭の中では諦めているとはいえ、それ以外のところで諦めていない節があるようだ。そうでなければこんな緊張はしない。しようともできないはずだ。

学校までたどり着くと……例によって校門に人だかりができていた。目当てはもちろん、文芸部の入部者発表である。クラス発表のとき並に大きな紙を使ったそれには数名の合格者の名前が書いてある。いかに、彼らが暇なのかじゃなくて、偉大なのが分かる。偉大……まあいい。

裾野ははちきれんばかりに鼓動を激しく行う心臓を、皮膚の上から驚づかみにして平静を保つ。

「……お、俺の名前……」

白い紙面に書かれている名前。小森慎也。こもりしんや

（クソ……あいつ受かりやがったのか！）

そしてもう一つ。庄内……？なんて読むんだか知らないが、裾野という文字とはかけ離れているから見間違いではない。

「……やっぱり駄目だったか。」

そのでかかとした紙が使われている割には、中身の薄いそれには、その二人の名前だけであって、裾野の名前は載っていないかった。無論、落胆はあったが、危惧していたので大した衝撃ではないしかし、部活動としてではなく個人の趣味としてやっていくことになる。それだと、やはり人から感想を貰うのが難しくなる。

しかし、小森の自慢話もどきを聞くのが辛いかもれない。耳栓

を用意しておくべきだった。

そこで裾野は気がついた。そういえば渚なぎさの名前も無かった。随分と彼女は自信を持っていたようだが、落っこちてしまったようだ。大丈夫だろうか。自分の疎さを木にかけて夜中の学校でめそめそしているような奴だ。夜に学校で首を吊ってもおかしくないかもしれない……。

裾野は下駄箱から靴を取り出しながら、そんな事を考えて……不吉だということですぐに頭からかき消した。だが、絶対に無いといえないところが少し不安である。

そんな不安のタネが、意外と普通に過ごしていたので、裾野はほっとした。お互い杯（原稿）を交わした身である。死んで欲しいとは思わない。

しかし、そんな安堵もそこまで。放課後になると密かに彼女に好意をもっているらしい男子（挙動がおかしく、裾野を見る目が嫉妬を佩びている）を経由して、ちよいと鳥肌が立つようなことを言われた。

すぐに屋上に来いだとか。

なんか、一緒に飛び降りて死のう的なことを言われるんじゃないかと、裾野は思ったが、その男子生徒の思いに免じて（決して懇願というわけではないものの）、意を決していつてみることにしたのだった。

そして、裾野が屋上への扉を開けると、黄昏気味の後姿を見せた渚が居た。流れるような長髪が風に靡なびいていて、その他の手もぶらりと垂れ下がって、その見えない双眸そつほうは絶望の二文字を凝視しているのかもしれない。

「……何の用だ……？」

裾野がそんな彼女の後姿に、見えない圧力を感じておずおずと訊ねる。

すると、渚はくるりと裾野の方を向いた。その眼には涙が溜まっ

て潤っているように見える。そして、思いつき怒鳴ってきた。

「何よあんた！悔しくないの！？」

「いいっ？」

そんないきなり叱責を飛ばしてくるもんだから、思わず裾野は身をよじる。

「何よ、あたしの心配ばかりして！あんだだつて頑張ったんじゃないの！？その頑張りを裏切られて悔しくないわけ！？」

ほとんど泣き叫ぶような形で渚が裾野に怒鳴る。裾野はただ、突然の展開に眼を白黒させているだけ。

「教室で様子を窺^{うかが}ってみれば、妙に吹っ切れた顔してるし、あたしが平気そうに振舞ったらほっとしたような顔してるし。何、最期の足掻きもしないで諦めた面してるわけ？」

「な……やっぱりお前、シヨック受けて」

「受けないわけないでしょ、バカ！ヘタレ！あんたが、今回必死こいてやってたことくらいあたしにも分かったわよ！あの文面読んだときのあんたの様子でよく分かるわ。」

「……………」

既に渚の涙腺は決壊を起こしており、そのガラス玉を詰めこんだように済んだ双眸からは涙がぼろぼろと零れ出している。こういうシチュは裾野は苦手。というか、苦手じゃない奴はとんだキザ野郎だ、と値踏みしている。

裾野は彼女の涙の叫びを聞いて、酷い後悔の念を抱き始めていた。確かに裾野の家にパソコンは無く、家での推敲はきかないが、あの渚に原稿を読ませたとき、あのまま引き返して学校でまだ練ることもできたはずだ。渚の評価を聞いてから、もう裾野の脳内には既に諦めという文字が循環していたのだ。

今回、入部テストに受からなかったことで、裾野はあまり衝撃を受けなかった。そこが何よりも熱意の無さの現れである。そんなので、受かるはずがない。

「…………分かったから…………そんな顔しないでよ。」

裾野が自己嫌惡に陥っているのをみかねてか、渚が涙を手の甲で拭いながらそう言つて來た。裾野はその言葉を聞いて我に歸る。

「わ……悪かった。」

「何で謝るのよ。謝るのは失敗してからでいいわ。」

「は？」

頭を下げる裾野に、渚が妙な單語を口走る。

「乗り込むわよ。文芸部に。」

第八刊っ！

乗り込む、と目的を告げられて裾野は困惑した。これが当然の反応であろうし、そのまま半強制的に手を引つ張られているのであれば、『どのようにして』を確認するのが定石というやつである。

「ちょ、ちよつと待てって！乗り込むってお前」

「愚痴愚痴いつてんじゃないわよ！あんたは別に入らなくても良いんだろうけど、あたしはどうしても入りたいの！あたしが入るにはあんたの協力が必要なのよ！」

「協力？」

渚の言葉に裾野は首を捻った。協力……なんて心当たりが無い。

無かったのだが、つまらないことに裾野はなんとなくその協力の内容がわかってしまったような気がした。

上履きと廊下が摩擦によって甲高い悲鳴を上げるがお構いなしに、二人は疾走を続ける。

裾野はこの現状を見つめなおしてみると……手を繋がれているということに気づいた。裾野が冷え性な訳ではないが、彼女の手は日向ぼっこから帰ってきたばかりの猫の様に温かい。そんな手にがちりと手を握られているわけだ。しかし、何故か実感が沸いてこないのは何故だろうか。

文芸部室に直接乗り込んだ日にや、無事成功して入れたとしても白い目で見られてしまうのは必須。文芸部室は部外者に対してその中の情報は門外不出。仮に入る予定の者であっても、部外者のうちには部外者なのである。

その辺は渚も承知しているらしく、裾野が連れて行かれた先は職員室であった。放課後という時間だけあって、教師達の出入りだけでなく、生徒の出入りも多い。

渚は躊躇いも無く、そのやや混雑している職員室に踏み込むと、新入部員の歓迎会的なものがあるはずなのにそこにいる草薙のもと

へと気圧だけで犬をも殺せそうな勢いでなだれ込む。

しかし、草薙には先着が居た。

「先生っ！お願いしますっ！もう一度チャンスを！」

見事に入部テストに落つこちたであろう、その生徒は一生に一度しか使えないお願いをしているといつても差し支えが無いほど余裕がなくなっており、干ばつが続いた村で雨乞いをしている村人のように必死で草薙に何かを懇願している。

「んー。仕方ないな、分かった。そんなに頼まれたんじゃ、このまま追い返すのは酷というものだ。締め切りは明日までだ。分かったか？」

「あ、ありがとうございますっ！」

そう言って、その生徒は草薙のもとから脱兎の如く飛び出していた。

そして、そんな光景を呆然と眺める裾野と、目的しか眼中に無い渚を見た。

「んで、君達か……この三十分だけで十三人目だ。」

そう言って、草薙は困ったように苦笑を浮かべて肩を竦めた。

「大丈夫だ。僕に了承を取れば後期試験があるから。」

「後期って……昨日のは前期だったんですか。」

裾野がげんなりとして訊くと、草薙はにやりと笑った。

「これも作戦だよな。本当に意志がある人はこうやってチャンスをもう一度掴もうとする。言ったものだね。溺れるものは藁をも掴むって。草だけにな。」

「はあ……んじゃあ、昨日の試験はカモフラージュなんですか。」

「うん、そうなるな。ちなみに蝙蝠君は正確に入部してないんだ。」

まだ重要候補っていう段階だから。後期の存在も知らせてある。明日が本番だよ。」

くいつと、裾野の服の裾を引っ張った手があった。裾野が振り向くと、さっきまであんなに憤っていた顔が、いつもの神経質そうな顔に戻っていて、その顔でじつと裾野の顔を凝視していた。

「どういうこと？」

裾野は心の隅でため息をつく。草薙が苦笑をしたまま、説明を始めた。

「だから、今日の朝の結果を見てがっかりしてそれまで……っていう奴ははつきりいつて、熱意が無いことと同義だ。だから文芸部もそんな奴はいらない。だが、一回やっただけではそんなのわかりつこないから、信条を試すだけの一次試験があるんだな。これでそういう奴らを篩ふるいにかけるんだ。んで、それに合格したというか、その結果に満足できない奴らがこうして、僕のところにくる。それで一次は合格。ってな感じか。だから、明日の二次試験が本番なんだな。」

「へえ……。」

草薙の長い説明を受けて（分かったかは定かではないが）、そんな風に渚が感嘆の声を漏らす。

「……んじゃ、俺たちも明日提出しますんで……」

なんていえた口ではないものの、裾野がこの場を締めることにする。まあ、これで渚の目的も半分以上果たせたようなものだ。

しかし。

「ちよつと先生？いいですか。」

と、渚が草薙が裾野達の名前をメモしようとした手を止めるように言った。

「ん？」

「あたしたちの作品を読んで、どう思いましたか？」

「ん……。ああ、そうだな。部員の感想を上げてみるとだな。」

一応、ダミーとはいえ審査は行ったらしい。草薙は机の中から感想を記した紙を取り出した。そして、パラパラとめくっていく。

「んー。裾野はだな。文の構成は良くできていて、状況の把握も容易にできるが、ストーリーやキャラクターに一貫性が見られる……言ってしまうとパターンの典型、二番煎じもいいところ。だそうだ。」

なるほど、よく分かってる、と裾野は頷く。

「奈倉か。物語的には、読者の裏の裏の裏をかくような、奇想天外な結末が良いんだが、何分、文に書き慣れてないのか、話が突飛したり見覚えが無い人物が現れたりいつのまにか終わってたり……、とまあそんなとこだな。」

渚の表情が曇る。

「んで、それがどうしたんだ。」

草薙がその評論を机に仕舞いつつ（丸秘って書いてあったが、晒して良かったのだろうか）訊いてきた。裾野も怪訝そうな顔をしたかったが……なんとなく予想がついてしまっている。

ダン！と『意義ありっ！』的に渚は草薙の机に手を叩きつけて言った。

「こいつと二人の長所と短所が交じり合ってるのであれば、これを組み合わせればよりよい作品ができると、あたしは踏んだわけですっ！」

そんな渚の熱弁を受けて、草薙は面白そうに頬杖をつく。

「ほお……なるほど。面白そうだ。てか、今回が初めてだね。二人三脚とは。悪くは無い。うん、むしろ面白い。よし、作ってきてみてくれ。明日までだぞ。」

裾野はなんとなく緊張の糸がほぐれたような気がした。その時の渚のなんともいえない、嬉しそうな顔は忘れられない。感情を隠そうともせず晒す、子供の様な少女なのだ。

第九刊っ！

「あんたの家、パソコン無いんだっ たわよね。」

「ああ。無いな。」

見事に時代に乗り遅れた家である。父が執筆するときを使うノートパソコンがあるが、父が友人から貸して貰っているものらしく、それにほとんどの時間、使っているので裾野は使用が困難なのである。

「はあ……んじゃ、ここのパソコン室借りるしかないわね。」

「え、お前の家にも無いのかよ。」

「苦学生だからよ。」

苦学生か。鞆についている装飾からして、そんな風には決して見えないのだが。まあ、あらかた予想はつくが。

裾野と渚は、草薙に宣言した通りに、二人でタッグを組んで投稿作品を書くこうとしている。互いの利点、渚の想像力と裾野の文章力が長けていて、他が駄目というのであれば、その利点をそのまま生かすのはもったいない。二人で手を組めば、1 + 1 = 2 以外の結果が出るはずだ。

「絶対入部するからねっ。何が何でも。初の二人三脚作家としてねっ！」

と、言うわけで。張り切った渚と共にパソコン室にやってきた裾野である。文芸部室にも執筆用のパソコン或いはワープロがあるのだろうか、パソコン室の中に文芸部員らしき姿は見当たらない。

この学校には、パソコンを活動の軸とする部活が文芸部しかない。基本的には放課後、パソコン室は閑散としている。先生に許可を貰わないといけないのも関係しているのかもしれない。とにかく、パソコン室内は閑散としていて、数人の生徒が調べものやらレポートをまとめたりしている。

そんな数人の中に小森の姿があった。

「いよう。二次試験か。」

「よ、勝ち組。」

「勝ち組なもんか。喜んで部室に行こうとしたら、あれは嘘でしたとかいいやがったんだぜ。全くぬか喜びだぜ。」

「やれやれ、と小森が肩をすくめる。」

「まあ、評価はあの通りだったようだぞ。うん、俺のは及第点だ。徹夜でやった甲斐があったもんだ。」

「んで、その徹夜の努力は水泡と化すわけか。」

「そうなんだよなあ。あの投稿したやつ、そのまま連続させてくつもりだったのによ。」

「……しかし、なんでお前はここに居るんだ。お前家にパソコンあるだろうが。」

「ふははは。よくぞ訊いてくれた兄弟よ！何と、俺が昨日印刷を終了した瞬間、勝利の記念として、プリンターに俺の手形をつけようと思いつき叩いたらなんとぶっ壊れちまったんだ。」

「相変わらずバカだな。」

「お陰さまでお前と同じ穴のムジアナだ。よろしく。新入りの小森だ。」

「生憎、蝙蝠こうもりの部屋は空いてないんだな、これが。」

「ぬうん。相変わらず冗談が下手くそだな。不肖の弟子を持って俺は哀しいよ。」

「弟子になった覚えも、冗談を極めようとした記憶も無いぞ。」

「さて、悪いが兄弟よ。俺は製作の途中なんだ。お前だってそのために来たんだろう？」

「ああ……そうだった。悪かったな。」

「ああ、悪かった。だから後でハーゲンダッツ奢れ。」

小森の戯言を聞かなかった振りをして背中に受けて、いつのまにかパソコンをキープしていた渚のもとへ向かう。案の定、裾野が近寄るとじろりと冷たい視線を向けられる。

「何か情報引き出せた？」

「あいつが馬鹿ということを再認識させられた。」

「馬鹿は馬鹿でもセンスのいい馬鹿は天才と同義よ。馬鹿と天才は紙一重っていうじゃない。」

「あっそ……。」

裾野はげんなりとして、渚の繰るパソコン画面に目を向ける。そこには、どうやらこれから作るらしい作品のプロットが出来上がっていた。それも一つではなくいくつも。さっき小森と無駄話をしていただけの時間でこれだけ作り上げてしまうものかと、裾野は舌を巻かざるをえない。

「もうこんなに作ったのか。すげえな……。」

「な、何よ。褒めても何も出ないわよつ。」

裾野が素直な感想を述べると、照れ隠しか強気なことを言うてくる。

裾野は渚からマウスを受け取ると、そのプロットを眺める。まだ、粹組みだけでぱつとしないものの、どれも巧妙に裏をかいているものばかりだ。

「どれにするんだ。」

「あたし的にはこれがいいと思う。」

渚は、ぴつと人差し指を伸ばして、ディスプレイを指差す。触れてしまわないかとヒヤリとしたが、寸でで止められているようだ。

その指されたそれは、没落した王国の王女が自分の息子を連れて逃げて、最終的にはその息子を生贄に捧げて己は天使になって空を舞うという、なんとというか奇抜というか殺伐としたというか、諸刃の刃というイメージがピッタリで、そんなのが三枚で収まるのか、という作品だ。

「……何か湿っぽいというか、すぎまじいストーリーだな。自分の息子を生贄にねえ……。」

「これ全体で伝える意図としては、『諦めるな』かしら。」

（諦めるな……。これでか……？）

「できるでしょ、あんたなら。」

「……他のは無いのか。ほら、これとか。」

裾野が示したのは、機関銃を常に携帯した高校生の非常識学園モノ。オチはその機関銃男に目をつけられた男子が、片思いの相手に自分の思いを告げ、実らなかったがその機関銃が、なんか哀れだ、よし俺が代わりに……、という危ない方面にいつちゃってるものである。裾野としては、少し最期をいじくれば、いけるような気がする。というか、これと前の没落王家のオチを混ぜれば上手くいくと思う。

「ふうん……まあ、あんたに任せるわ。じゃあ、ほら書いてよ」

そういつて、渚がパソコンの真正面となる席を退いた。裾野は半ば強制的にその椅子に座る。少しばかり温もりが残っている。それから、キーボードに指を走らせる。

プロットの詳細を、隣で佇んでいる渚に聞きつつ、その情報で自分の頭の中で文章化して、そのままディスプレイに打ち出す。

裾野は、こんなにも筆がスムーズに進む快感を感じて、既に入部していたような気になってしまっていた。

第十刊ッ！

あーだこーだと、内容の濃い応酬を続けて、文章に鑢やすりをかけていたって、もう七時になってしまった。だが前回は九時まで掛かっていたから、これはこれで良い方だろう。

「まあ、こんなもんでしょ。」

渚が印刷された原稿の端を机で叩いて揃える。

プロットでは何でもないような内容だったが、いざこれを文章化するととなると、その下手すれば長編を一本書けそうなデータをシートシートにまとめるのは難しかった。最初とりあえず書き上げてみたが、大分予定量よりオーバーしてしまった。さして重要ではない部分を消していったら、結局重要部しか残らなかったのが気がかりだ。

既に誰も居なくなっている（小森は印象的な笑みを残して五時くらいに退散していった）パソコン室の設備のチェックを一通り行い、廊下に出て鍵を閉める。

「じゃ、これでお願ひします。」

そのままその足で職員室へ行き、帰って風呂入って寝よう的な感じで帰ろうとしていた草薙を捕まえて、印刷したてはやはやの原稿を提出する。

「ん、にゃ、ご苦労さん。じゃあこれは部員全員に回し読みでもさせて貰う。」

「え、まだ残ってるんですか。」

「いや、FAXを使って部員全員にばら撒く。」

隣の裾野の口あたりの高さのから発せられる、飛べないハトを食べようとしているカラスを見るような視線が草薙に衝突する。それでも、草薙は苦笑に見える笑みを浮かべるだけ。

「早めに結果が出たほうがいいだろう。どの道結果が出るのは明日以降だろうけど、提出と読了は早い方が得点と評価は高いからね。」

嫌ならいいけど。」

「……んじゃお願いします。」

「分かった。じゃあ、結果発表は当選者に発送を以って代えさせてもらう。んじゃ。」

「……さよなら。」

草薙は颯爽と踵を翻して、職員用玄関から去っていった。

次の日の放課後。草薙もとい文芸部からの音沙汰は一切無かった。裾野は不審感を抱きつつも、草薙の発表は発送をもって代えさせてもらうという言葉^{はんすう}を反芻し、それを信用して今日は帰ることにした。

部活に入るつもりがない、或いは仮入部なんざに入らなくても、その部活に入るとは確定しているから、別に行かなくてもいいやという根性が腐った奴、或いは文芸試験におっこちて、路頭に迷っているプチ浪人生などの流れに乗って下駄箱へと向かう。

家に帰ってからどう父と妹の攻撃を凌ぐ^{しの}か熟考しつつ、下駄箱を開けると……ピンク色の封筒が靴の上に載っていた。それを視界で確認した瞬間、裾野は下駄箱を閉じて周囲を見回す。これからあそばねー？だとか、文芸試験におっこちた奴を励ましている（二次のことは知らないらしい）奴らが続々と昇降口から吐き出されている。裾野はもう一度、下駄箱を開けた。そこには代わらずに仄かなピンク色で彩られた封筒がある。それを、端っこが熱くなった銅版をもつように、人差し指と親指でつまむ。それから、生きているスルメイカを扱うようにそーっとその金色の封を解く。

中から現れたのは、やはり封筒と同じような色合いの便箋。

それを開くと、女々しい字で何処か生々しい文がぎゅちりと書かれていた。

『拝啓、裾野良司様^{りょうじ}』

私^{わたくし}、生まれたときから貴方のことが大好きでした！！

！何か甘ったるい、見てると口の中に不快感が溜まっていくような

文がかかれていますので中略
貴方の考えが聞きたいです！良かったらすぐ、体育館の裏に来て下さい

硝

煙の歌姫』

「……誰だ。」

誰だよ。硝煙の歌姫って。

第十一刊つ！

裾野はそのピンク色の封筒の中に、同色のピンク色の紙を入れて鞆に突っ込むと、指示どおりに体育館裏に向かうことにした。別に、ラブレターのなものを貰って嬉しくなつて浮かれ気分で居るとかいつたら、そうではなくむしろ逆で、こんな性質の悪い物品送つてきた奴の正体を拝んでみたかったのである。硝煙の歌姫というのモ気になる。こんな阿呆らしい名前を使つてゐる奴というのモ気になる。

体育館裏というと、何故だかベタに感じるがそこはよくバドミントン部に占領されている。だから、そういう秘密事をするにはここではなく、教師用の駐車場とかそういう人気が無いところがいいのだが。まあ、こんなのを送りつけてくる奴の考えることは分からない。

そんなことを考えながら、何気に胸を焦がしている裾野だったが、体育館裏につくと目を瞠つた。いつもここらを占領している（らしい）バドミントン部が居なく、閑散としていた。ただ、居た証拠として無数の足跡がついている。

そして、そこに佇んでいる一つの影。例の硝煙の歌姫だろうか。ただ、その後姿は意中の人に胸の中を吐露しようとしているという雰囲気というよりは、果たし状を叩きつけた相手を待つ姿に見えるのは気のせいだろうか。何故か命の危険を感じてならない。

絶妙な静けさの中、一筋の風が裾野の頬をなで、その軌道のまま近くにある生物部の管理下におかれてゐる杉を揺らす。

もはやここまで来てしまつたら引き返すわけにもいかまい。裾野は意を決して、その後姿へと近づいていく。

近づいていくと、一つの不安の要素が消えた。どうやら女子らしい。もし男だったら、という不安がずつと頭に残つてゐたから、これはこれで安心した、といえるだろう。

そして、その後姿に残すところ三メートル辺りまで近づいたとき

だった。

「やつときたわね。」

「へ？」

刹那、その後姿はぱつと振り向き、その振り向いたときの遠心力に腕を任し、その手で作られた手刀は裾野なぎ払わんばかりに襲い掛かってきた。

「うおおおっ!？」

裾野は脊髄反射でその手首を両手で掴む。あたった瞬間じんわりと痺れが伝わってくる。

「っ!」

その初対面どころか、顔すら合わせてないのに襲い掛かってきた非常識人間は、裾野に受けられたことを認識すると、舌打ちをして、その顔を裾野に向けた。

「流石、ヤベっちに文章を認めて貰えるだけあるわね。」

「や、ヤベっち?」

その裾野と同じ学年ではないっぽい女子は、さっと裾野から身を引くと、腕を大仰に組んだ。

「まんまと引っ掛かってきたから、意識を剥ぎ取るのも簡単かと思っただけ、そうもいかなかったみたいね。」

自転車を漕ぐ時はペダルを踏むんだよ、と教えるくらいあっさりと恐ろしいことを言う。引っ掛かったとは、どうせあの明らかに偽者のラブレターのことであろう。別に引っ掛かったわけではない。と、いつでも誰も聞く耳を持たないだろうが。

「だ、誰ですか。あんたは。」

一応先輩っぽいので、裾野はげんなりとして慣れない敬語を使う。「ふふん。私はこの蜀蔵高校の偉大なる文芸部の部長の州崎美野里すけのみのりよ。」

美野里と名乗った彼女は、そう言って胸を反らす。

裾野はそれを聞いて目を丸くする。

「ぶ、文芸部の部長!？」

「そうよ。何その大袈裟なりアクションは！」

「い、いや……」

とてもそんな風には見えなかったとは言えない。

「んで……何のようですか。」

あらかた、ここに陣取っていたバドミントン部もこいつが追い出したのであろう。裾野はげんなりとして、訊ねた。

「ああ……そうだった。喜ばない！あんたは明日から正式な文芸部員よ！」

「え？」

裾野はそんな当たり前の様に言う美野里の言葉に不純を感じて聞き返す。

「だから、あんたは今日から我が文芸部の新入部員なのよ。分かった？まあ、明日になったら嫌でも分かると思うけど。」

「わ、分かりましたけど……へえあ……。」

サプライズとかそういう問題じゃない。何かずれてるような気がするのには気のせいだろうか。そうであってくれと願う裾野である。

「何毒を抜かれたコブラみたいな顔してんのよ。喜ばないよもつと。」

「え、ええ？マジっすか！？」

「ホントよ、マジよ、リアリーよ。信じなさい。ついでにヤベっちを崇めなさい。」

「誰ですか……ヤベっちって……。」

「明日紹介するわよ。とりあえず、今日はこうやって告知するので精一杯なのよ。文芸部だつて暇じゃないんだから。」

「はあ……ところで、俺は二人三脚であれ提出したんだけど、もう一人の方は……」

無論、渚のことだ。

美野里はそれを聞くと、口端を吊り上げた。

「そっちはそっちで、ヤベっちがあんたと同じように武道場の裏に呼び出してあるわよ。ふふん。きつと一目惚れね。」

（あいつなら、一目惚れする前に逃げ出しそうな気がする。ん、それを一目惚れというのか？）

「まあいいわ。とにかく、私が伝えることはこれだけ。分かった？」

「え、ええ……まあ。」

「分かった？」

「……分かりました。」

「分かった？」

「分かりましたってば！」

「何がわかったのよ。」

「俺が文芸部員の仲間入りを果たしたんでしょう？」

「正確には、パシリとして弟子入りを承認してあげたまでだけどね

……間違っではないでしょう。」

「え！？」

「なんでもないわ。まあ、それだけわかってるならいいわ。じゃあね。気をつけてかえりなさいよ。あんたはうちの可愛い新入部員なんだから。」

「……」

人格が歪んでいるのか、それともわざとそうしているのか。

裾野が結論を出せぬまま、美野里はその場から立ち去っていった。それから数秒とすると、バドミントン部の連中がわらわらと入ってきた。

変な視線を当てられる前にと退散して校門に向かうと、武道場の裏からふらふらと渚が現れた。美野里の話は本当だったらしい。

「……おい、どうした。」

「ひゃ……ひゃった……」

「？ おっおい！」

舌足らずにそう言って、渚はぽふんと裾野に抱きついてきた。

「つ、ついに天安泰の時代が……」

それから、駅について別れるまで渚の口からは意味不明な言葉だけが絶えずあふれ出ていた。

第十二刊つ！

「……眠そうだな。」

「……あんたもね。」

「……」

二人は今、学校にいる。学校とは無論、蜀蔵高校しやくざうこうこうのことである。しかし、二人の会話が示唆しきするように、今日この二人はここにいるべきではない。家でまだ寝ている時間である。周囲の景色には霞みがかかり、地平線に程近い東の空から溢れんばかりに太陽の光が漏れてきている。

午前四時である。しかも、休日の。

理由は単純明解で、朝？携帯に連絡が入ったのである。例の部長から。

『一時間後から新入部員歓迎会するから、ごたごた言わないでさつさと学校来なさい。以上。』

とのこと。その日の午前中は寝て過ごす予定だった裾野すそのにとつては、はた迷惑もいところである。

渚なぎさも眠そうだ。まあ、この時間にたたき起こされて眠くない奴なんて、夜型の奴くらいであろう。部長の美野里みのりの神経の構造をみてみたいものである。

明け方しかも休日という最悪のコンディションが重なり、学校には人のいる気配も感じられない。二人の足で廊下を叩く音が乾いた廊下に響き渡っているだけで、小鳥の囀りさえずという上品な音楽も聞こえてこない。

文芸部室は、敷地の北側に位置する新校舎の最上階にある。眺めはいいのであろうが、疲れているときにはただの嫌がらせにしか思えないのは、裾野だけだろうか。

「……入ればいいのよね。」

「まさかここで歓迎会とやらをやるわけじゃあるまい。」

今時の新しい建物には珍しい、開き戸のドアを右手人差し指の付け根の関節で軽く叩く。コツンコツンと乾いた小さな音がして、聞こえないんじゃないかと裾野は危惧したが、ほどよくして中から声がした。それから、威勢良くドアが開く。威勢良く裾野の鼻先にドアが叩きつけられる。痛々しい。

「ホントに来たわね。まあ、いいわ。入って。」

でてきた人物は美野里で、綺麗にまとまったセミロングの髪を揺らして、二人入室を促した。鼻の痛みに悶え蹲る裾野を一瞥もせず。渚は苦笑いをこぼしている。

裾野は鼻の痛みに耐えつつ、落着いたところで部室に入った。：

…そこに広がる光景を見て、裾野は絶句する。

まるでパソコン室をそのまま切って持ってきたような部屋だった。小綺麗なパソコンがずらりと並び、部屋の扉から一番遠い場所にはひととき大きなデスクが置いてある。その机の上には、『部長席』と、立て札が置いてある。……。

「やあ、これはこれは朝早いのにご苦労様です。」

そんでもって、爽やかとは千歩譲ってもいえないような朝とは不似合いに爽やかなテノールボイスが裾野の鼓膜を叩いた。隣で渚が「うう……」と嫌そうな顔をしている。

「わおっヤベっち。今日もかつこいいわねえ。」

美野里はそうテンション高めに（高くなったのか？）、ヤベっちと呼ばれた青年の肩を叩く。背伸びをして。大分身長が高い。裾野よりも半頭身ほど高い。スラリとした四肢が見てるのも苦になるくらい輝いているように見える。そしてその美麗な顔。愛を知らない云々というプロフィールをつけられたキャラクターですら恋をしてしまつような、平たく言えばハンサム。

「矢部広樹と申します。よろしく。」

「ど、どうも……。えと」

「裾野良司君ですよ。例の原稿、拝見させて頂きましたがかなりの腕前をお持ちになられているみたいですね。惚れ惚れしましたよ。」

「は、はあ、それはどうも……」

これならあの部長が惚れてもおかしくないな、と裾野は心の底から思った。

「ヤベっちは副部長よ。覚えておきなさいっ。」

美野里が、部長席と書かれたデスクに座って言った。その偉そうな様はどんな権力者にも劣らない。本人も満更でもないということか。

「ほ、他の人はどうしたんですか？」

裾野が、そんな二人にビビリつつ訊いてみた。もつと生真面目な部活かと思っていたが、部長のテンションが異常だ。

「むーん？まだみたいね。指定した時間が早すぎたかしら？」

美野里が不思議そうに呟く。それを聞いて矢部が苦笑する。

「部長は気まぐれが酷いですからね。部員達も貴女のペースについていけないのかもしれない。」

「……そう？」

美野里がちらりと横目で矢部を見やる。それを見て、矢部はにこりと笑う。なんだこの図は。

「まあ、部長の早とちりは今に始まったことじゃないですからね。部員もじき来るでしょう。とりあえず、かけて待っていてください。」

矢部にそう促されたので言葉に甘えて座らせてもらう。

「……なんか、色々と想像以上だな……。」

裾野が隣に楽しそうに部屋の中を眺める渚に言った。

「え？どこらへんが？」

という返答が帰ってきたので、うつかり椅子から転がり落ちそうになってしまった。

第十三刊っ！

「おおおおギリギリイっ！！」

裾野はため息をついた。ダミーになったというのは伊達じゃないようだ。

ドバーン！と開き戸が思いっきり開いて、決して颯爽さうそうとはいえないような風体で、小森こもりが現れた。それを見て、美野里が顔を綻はなばせる。

「ギリギリでもないわよ。後、十分くらい余裕があるから。」

「おお……それなら良かったっす。ん……？」

小森がすーっと裾野の方に顔を向けた。そして、その口端をにまーっと吊り上げる。

「おおっ！お前も生き残っていたか！信じていたぞ！」

「……お前朝っからテンション高いな……。」

「当たり前だ。人生で一番輝くべき高校生活の真っ最中なんだぞ！ここを楽しまないでいたら、一生楽しむ機会なんて無いっ！」

「よくぞ言っただけです。正にその通りです。その言葉は我が部の活動理念に含まれていますよ。流石、ダイヤの原石と顧問殿が謳った通りですね。小森君。」

「お、お褒めの言葉、光栄でありますっ！」

反応を示した矢部の言葉に、小森は体を真っ直ぐ垂直にピンと伸ばして、腰の辺りから九十度に曲げる。

「へ？あんた、小森っていうの……？」

そこに渚がぼかんとした調子で口を挟んできた。憤然と胸を張って、小森が答える。

「正にその通り！宝剣を手てに小森慎也しんや、ここに参上中だっ！」

現在進行形にしたところを突っ込むべきか。

「あ、あ、あんたが……あたしの趣味を知ってるって本当っ？」

渚が恐る恐るといった感じで言った。裾野は趣味という単語に首

を捻る。渚の趣味の話聞いたことが無い。

しかし、小森は顎を人差し指と親指で撫でながら、ひねり出すように言った。

「趣味？ああ、知ってる。というか、事実を並べた上での推測ではないが、まああらかた分かっているといっても語弊は生じないだろう。」

「なっ なっ 何を知ってるのよ」

「んーっとだな。深夜にこっそりあぎやあああああああー！」

渚のドロップキックが小森の骨盤の中央に位置する場所にクリティカルヒット。ありやあ痛い。すぐに要所を抑えて蹲る小森。どうやら地雷を車で踏んだらしい。

「……過激だな……。」

「あんたもし聞こえてたんなら記憶を抹消しなくちゃいけないんだけど」

「いやっ！聞こえてない！聞こえてないっ！神に誓ってこれはいえる！」

そんな裾野と渚の応酬を見ていた美野里だが、面白そうにやりと笑った。

「今年もいい一年生が入ったんじゃないの？流石、将来の私の嫁のヤベっちなね。」

「語尾についている一言は、死刑執行前の死刑囚に歯磨きをさせるくらい蛇足ですが、確かに今年の新入部員は生きが良いのは事実です。」

矢部も同意して頬を綻ばせる。

そんな時、再びドアが開いた。

「……古今東西、周囲に分散す数多の靈気をこの手で引き裂き、幾つの難題を乗り越え今宵、我黒形翔一郎、ここに見参っ！」

そんな無骨な声が文芸部室内に轟いた後、普通の制服を着た男が入ってきた。制服を着ているのだから、この学校の生徒だろうが、その顔には何やら黒い布が巻きつけられており、左眼だけが露出し

ているだけという、そのままの格好でコンビニに入っていけないような体裁である。

「クロちゃん珍しく遅かったわね。」

「うむ……たくしーが捕まえることがでなく……不肖。」

少しばかり外来語を喋りにくそうに喋る、黒形。裾野はそれを呆然として見ることしかできない。テンションとかそういう問題なのか、これは。

「あ、おはようございます。」

それからまた解放されている扉から誰かが現れた。小柄なよく少女漫画の主人公にされそうな、普通の少女に見える。だが、どうせまたこれも一ひねり入ってるんだろう、と思っていると……案の定だった。

「うわお！珍しいですっ！クロさんが扉をこわさないで部屋に入ってくるなんてっ　チルちゃんもう今日は幸せに巡りあえないかもしれませんっ」

の部分にいちいち決めポーズを決めている。そんな彼女を、黒形が心外そうに見ている（一応彼への皮肉が込められている）。裾野はさつきよりも呆然の気を強めてそれを見るしかない。

（……何だこの集団は……）

「隙有りっつー！」

そんな時に、そんな声が掛かって……裾野の視界に星が飛び散った。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

「甘いな。新参。」

黒形は紙製の剣を懷にしまいつつ言った。紙製だと刃に書かれており、外見もそのまんま紙だが、裾野はそれと痛みが決定的に矛盾しているように感じてならない。

「おお、裾野大丈夫か。」

小森が面白そうに声を掛けてくる。

「おお、クロちゃん流石ね。初見で裾野君の弱点を看破するなんて

「そのようなおーらを漂わせていておりましたから……、わけないことです。」

裾野は目を白黒させながら立ち上がる。額の痛みが取れないが、一応行動不能からは復活できた。

「後の二人はどうしたんですかぁ？」

ちっこい少女が美野里に訊ねた。

「そうねえ。まあ今日はいつもと違って歓迎会だし。ゆったりと来てるんじゃないの？」

「そうですかぁ。」

それを聞いて、裾野は更に顔の皺を濃くする。

（あ、あと二人もいんのか！？）

第十四刊っ！

「裾野^{すその}さんと奈倉^{なぐら}さんっていうんですかあ。私、空井^{そらい}ちづるっていますう。略してチルちゃんと呼んでくださいっ」

「さっき申した通り、黒形^{くろがたし}翔一郎^{しょういちろう}と申す。呼び名には固執しない。好きに呼ぶがいい。」

「皆クロちゃんって呼んでるから、新入生諸君もそう呼んだら？一人クロたんって呼んでるけど。」

「いい加減駆逐してほしいのであるが……。」

黒形はそう言っ、それだけ露出している左目を^{すが}眇めた。

二人とも二年生とのことだ。即ち、一応先輩なのである。裾野はなんとなく眩暈を感じる。

「ほへえ、黒形ツスか。なんか赴きがあつてカッコイイ名前っスねえ。」

「ぬ、分かるか新参。貴様とは話が合いそうだ。」

と、何故か小森と黒形は意気投合しており、

「奈倉さん、朝御飯食べてきましたかあ？」

「いえ……今日は急いでたもんで。」

「駄目ですよー食べないとお　元気でませんし、何より太っちゃいますよー。これあげますう、チルちゃんの大好物なんですう」

「あ、ありがとうございます……」

ちづると渚はそれはそれで会話が成立している。

と、いう訳で裾野は客観的にみると取り残されているように見える。

「ふふ、寂しそうですね。」

そんな裾野を見かねたのか、矢部^{やべ}が話し掛けてきた。

「……寂しいというよりは……意外ですね。」

「ほう。意外ですか。どうしてです？」

「いえ、こないっっちゃ悪いですが、堅苦しい制度をとってるのに

…… なんとかいうか、穏やかというか……」

「ふふ、個性的でしょう。我が部の活動理念に基づいた人材選びを徹底すると、どうしてもそうなってしまうのですよ。」

そこで扉がまた開いた。裾野は無意識のうちにそちらに目をやる。色の濃い腰回りまである髪が印象的な、これまた女子である。

「仮にも文芸部ですから。」

矢部が裾野の表情の変化をどう受け取ったのか知らないが、そう言っただけだ。

そこそこテンションがノッてきた美野里みのりが彼女に軽快に話し掛ける。

「はろートラちゃん。」

それを見た彼女は口端をにっこり上げて、その返事を返す。のだが……。

「おう。」

と、その口から飛び出たのは勇ましい言葉。裾野はこれまた椅子から転げ落ちそうになる。

「一つ一つの事柄にいちいち驚いていては、いつかは精神が病んでしまいますよ。そろそろ慣れたらどうですか？」

「む、無茶言わないで下さいよ……。」

にこやかにそんなことを言う矢部に、裾野は声帯の奥から声をだす。どこかそんな裾野の様子を面白がっているような感じがする。

「んじゃトラちゃん自己紹介お願いするわね。」

「あ、ああ。ん、三年の富樫とがし憧しょう……だ。」

「略してトラちゃんね。」

何処らへんを略すとトラになるのか不明だが、そんな常識はこの部活では市販のお札並に効力を持たないのであろう。裾野は口を噤つぶんでおく。

「後はスライムだけ？」

「そうですね。」

「す、スライム……。」

この部活内で仇名だけでどんな人か判断するのは危険であると、裾野は学んだばかりである。ここは下手に想像したりせずに事実を確認した方がエネルギーを有効に活用できると踏んだ。

「キャハッ。裾野さん困ってますっ」

「え……」

そんな時にちづるが例によつて、異常なテンションで言つて来た。
「スラさんは面白い人ですよ」お　　きつと裾野さんもお気に召す
と思いますっ。」

「は、はあ……。」

そんな時に待望の最後の扉が開く。

「ふあ……、おはようございます……。」

髪をポニーテールにした女子だった。

ようやくといつていいほど、外見が（登場の仕方が）普通な人が現れたことに、裾野は安堵する。頭の独立語が指すように、その表情には『眠い』と書かれており、半開きの目を擦つてなんとか意識を保っているというような状態に見える。

そんな彼女に美野里が軽快に話し掛ける。

「おつはよー、スライム。今日はまた一段と遅いわね。なんかあったの？」

「ふあ……寝坊です……。昨日のうちに言つてくれればもつと良かったんですが……ふあああ……。」

気の毒になるくらい眠そうだ。裾野もそんな様子を眺めてると眠くなってくる。何度も言うが、今はまだ五時をまわったばかりである。

「あ……えと……二年の落合志奈おちあいなって言います……ふああ……。」

自己紹介も途切れ途切れ。ちよつと突付いたらぽてんと倒れてすぐ寝息が聞こえてくるだろう。

「よーっし。全員揃ったわね。それじゃ、これから新入部員歓迎会を始めるわよっ。」

文芸部一同が集結してそこその人口密度である部室内で、一人

徐々にテンションが上がってきた部長がそう叫んだのだった。

第十五刊っ！（前書き）

ここからキャラ詳細紹介という形になります。

第十五刊っ！

「これから、部員同士の親睦を深めるためにゲームをするわよっ！
新入部員との親睦はもちろん、今まで触れ合ってきた仲間との親睦
もこの際深めるところまで深めるわよっ！何か異論は？」

みのり
美野里が部長席で、声を張り上げる。

無い。というか、ゲームという表現が曖昧で裾野すそのには突っ込むベ
き部分が分らない。

「ふふん。流石我が部員達。物分りがいいわね。特にヤベっち。」
ヤベっち狂信徒である美野里に、矢部やべは綺麗な毒が塗ってある綺
麗な棘がたくさん含まれた視線を彼女に送っている。不可視の毒矢
ほど凶悪なものはない。

「ゲームのルールは簡単！あんたたちには、まずペアを組んでもら
うわ。それはあたしがクジで決めさせてもらうわ。それから、いろ
んな指示が書かれたこの紙の束を持って町に出て行ってもらう。ふ
ふ、ここまで来れば何をしたいか分かるわよね？」

何かテレビ番組の企画でありそうなゲームだな、と裾野は思った。
不意に服の裾を引っ張られた。振り向くと思案顔なげなの渚の顔があっ
た。

「どういう意味？」

「ああ……つまりだな……。ペアを決めてそいつらでいろんな指令
をクリアしてくんだよ。」

「……へえ……。」

「意味がわからなくても大丈夫よ。やってく内に分かるから。」
美野里がそんな風に付け加えた。

「あと、ペアの相手がずっと同じのじゃ親睦を深められないから、
街中で他のペアと出会ったら、そのとき組んでるペアとジャンケン
をして、勝者は勝者と、敗者は敗者と組む。片方と組んだことがあ
るなら、もう片方と強制的に組む。両方組んだことがあるならさよ

うなら。良い？」

色々と不可解な点が多いが、まあ実際にやってみるのが早いだろう。裾野は一応周囲の反応に便乗して頷いておく。

「そしてえっ！その指令をこなした数が一番多かった人にはなんと図書カード五千円分プレゼントおっ！」

「いえーい！と、掲げられたその手には『5000』という文字が書かれた図書カードが。なるほど……景品も文芸部っぽい。」

「それじゃあペアを決めさせて頂くわねえ。っと。」

美野里はそう呟いて、がさごと部長席から四角くて穴があいている箱を取り出した。その中に手をつ込む。どうやら抽選形式らしい。

抽選が全て終了した。裾野は最後に現れた志奈しなと最初にペアを組むこととなった。喜ぶべきなのか安堵するべきなのか落胆するべきなのか、裾野には判断がたい。まあ、結構一般人っぽいから、ここは安堵するべきなのだろう。

「よろしくね……ふあああ……。」

「……よろしくです……。」

ぼんわかと瞼を半分以上閉じてそう言ってくる。いつばたんきゅくしてもおかしくない状態である。この辺を考慮すると安堵するべきだったのだろうか。

ちらりと見ると、渚は小森こもりとペアを組んでいた。なんというか、露骨に嫌そうな顔をしている。裾野が気の毒そうに眺めていると、助けてくれといわんばかりに睨まれた。慌てて目をそらす。

「ふうん。裾野君はスライムと一緒になのね。泣かせないようね。」

「はい……って、そんな野暮なことはしませんよ。」

「それならいいわ。はい、これ指示カード。」

美野里が差し出した指示カードとやはらは、何やらプラスチック製のホルダーに入っていた。

「一枚ずつしか取り出せない仕組みになってるわ。指令を達成するまで次のカードは抜けないわよ。」

「それはなんと画期的な……」

どういつ仕組みかは追求しないことにしておいた。この部長さん、常識から激しく逸脱しているからまともな答えは返ってこないだろう。

「それじゃあ行つてらっしゃい」

「……行つてきます。」

「行つてきますー……ふああ……」

かくして、トンでもないゲームが始まってしまったのである。

第十六刊っ！

早朝である。ようやく日が昇り始めて、早起きな人でもようやく起きはじめの時間帯である。それが直接関係して、本当に外は閑散としている。車もまばらに通るだけ。自転車も滅多に通らない。通行人となると尚更。

裾野^{すその}は、自分の手に握られているフォルダーに目を落とす。皆程よく散らばったところで一枚目を解放するらしい。どうやって把握するのは謎だが、どうせあの部長が上手いこと手回しをするであろう。

今、裾野は宣告どおり、例の睡魔百頭程と戦闘を強いられている、志奈^{しな}と共に行動している。

彼女は裾野の一年上、二年生らしい。眠さのために半分閉じられた瞼が無くなれば、温厚そうというイメージがぴったりであり、更にその半分しか晒されていない瞳が、のんびりというイメージを上乘せしている。争いごとに興味を持たなさそうな、マイペースな人眠気とその凄まじい粘着力を持つのにびりさが無くなれば、普通の女の子であろう。

眠そうなのは今に限ったことなのか、デフォルトなのか知らないが、かなり不安定である。言動足取り表情全てが。

そんな状態を見るに耐えて、裾野は口を開く。

「……大丈夫ですか？」

「ふああ……お腹すいた……。」

口を開けば欠伸が出る。重症だ。

「……無理してこなくて良かったんじゃないですか？」

「……どうして？」

不思議そうに首を傾げる志奈。

「え、だって滅茶苦茶眠そうじゃないですか。」

「ふあああ……大丈夫、これはいつものことだから……。」

「いつものことって……………」

「なんだか先が思いやられてきた裾野である。毎回こんな時間に呼び出されるのか？」

「ん…………お腹すいたからさ…………食べていい？朝御飯食べて無くて…………」

「ああ…………俺は構いませんよ。」

「実を言うと、裾野も食べてきてない。朝は慌しかったから。電車が動いていないので、父からタクシー代を貰って（今日も徹夜だったらしい）たりしたら、朝食のことなんて忘れてしまっていた。」

「タクシー代が余ったからそれから朝食代を引くことにした。どうせ父の金である。」

「…………でも何処で食べるんですか。今の時間帯じゃマックも開いてませんよ。」

「…………カラオケ。」

「へ？」

「カラオケ行こ。」

「あ…………朝っぱらからですか…………？」

「ふあああ…………そう。御飯も食べられるし。一時間だけ…………ねっ？その言動から察するに、どうやら朝食は服目的らしい。」

「た、食べるだけですか？」

「…………それじゃあお金が勿体無いでしょ…………。」

「それならコンビニで買ってもいいんじゃない…………っ！」

「裾野はそこで言葉を切る羽目になった。さっきまで寝惚け眼だった志奈だが、その潤んだ双眸は完璧に瞼の裏に隠されて、脳も休眠状態に入ってしまったようだ。」

「ぼふん、と裾野の胸の中に志奈の体が収まった。それから健やかな寝息が聞こえてくる。」

「裾野は慌てて周囲を見渡すが、人影は見当たらない。この状態を客観的に見るとどうなるのだろうか。」

「らぶらぶな恋人たちにも見えたりするのか？」

「あ、ちよつと待って……二二、二二」

「え？ ……ああ……。」

志奈の指差すさきには、『カラオケ』の文字が。しかし、その看板は随分と汚れている上に、シヨッピングモールのどでかい看板に三分の二が隠されていて、よっぽどの観察眼を持つていなければ見つけることは難しいだろう。その上、入り口は業務用の入り口のような姿をしているので、看板を見つけれても店を見つけるのも難しいかもしれない。

「……ここならいつも空いてるし……オーダーもできるから……ふあああ……」

「は、はあ……って、ちよつと待ってくださいっ！ 少しは躊躇ためらいっつてものを……」

千鳥足でその入り口である開き戸を開けて入っていく志奈を、慌てて追う裾野であった。

第十七刊つ！

五時営業開始らしいこの店。開店直後だからなのか、それとも単に知名度が低いだけなのか、店内は閑散としていた。というか、BGMすらかかっていないのはどういうことなのだろうか。ここは本当にカラオケ屋なのだろうか。

「いらっしやいませ。」

図太いが、精一杯の愛想を込めた挨拶が飛んできて、裾野はそちらに目をやる。そのカウンターに精一杯の愛想笑いを浮かべた、店員らしい大男が立っていた。いかつくてゴツイ無精髭を生やした顔に、長袖のYシャツをまくって露になった丸太のような、という比喻がぴったりの腕には一閃の傷が刻まれている。知らずのうちに、裾野は背筋が強張っているのに気づいた。

「ふああ……二人、一時間で……くしつ。」

そんな彼に怯えた様子を微塵も見せずに、志奈が話し掛ける。最後のくしゃみは花粉症だろうか。

「了解しました……っと。では一番のお部屋でどうぞ。時間になりましたらコールしますので、ごゆっくり。」

そう言つて、大男は内に引っ込んだ。

志奈は裾野を見上げて言った。

「……じゃあ行こっか。」

「は、はい……」

なんで部活に來たのにカラオケに來る羽目になったのだろう、と裾野は疑問に感じつつも志奈についていく。

一番と称された部屋は、二人で過ぐすには少しばかり大きかった。二組のソファが壁に沿うように置いてあり、部屋の隅に申し訳なさそうに、テレビとカラオケ本体が置いてある。

「ふあああ……まず朝御飯食べちゃおうか。」

「はあ……。」

志奈がメニューを手にとって言った。

メニューを眺めて、裾野は眉を顰めた。どう考えても朝食にも昼食にも向かないような品が並んでいる。……カラオケで1800円のスTEEキ（100g）を食う奴がいるのだろうか。

裾野は無難にアメリカンドックが欲しい、という旨を内線の受話器を握り締めている志奈に伝えた。

「……さて、まず何から歌おうか……つくし。」

「……風邪ですか？」

「ん……癖、かな。」

「はあ……」

やはり常識の範囲内で説明できる人でなかったようだ。

「ん………？」

そんなとき、鞆の中で何かが動いたような気がした。携帯のバイブレーション機能の様な振動。

「……どうしたの？」

「……指令っぽいですね。」

鞆の中からその指令の書かれたカードが収納されたフォルダを出した。そこからベーっと、指令書らしい紙が出てきている。無駄に画期的である。

「へえ……去年はそんなの無かったのに……ふあああ……。……それで、なんて書いてあるの？」

裾野はそう促されてその紙面を見た。

『一番近くに居る人と腕相撲して勝つ』

「うり、やあああああああああああつっ！」

早朝の開店したばかりのカラオケ店に、そんな場所違いの雄叫びが響いている。その声の主は裾野である。

カウンターを台にして、例の店員である大男と腕相撲している最中だ。

しかし、その光景には何か違和感がある。槍と拳銃が戦ったらど

こちらが勝つか？と問われたときのような違和感。

単純に言えば、力の差が歴然としすぎているのである。ネギで大木を倒そうとしているように見えなくも無い。その裾野の手を握っている手は、軽く裾野の手を呑みこんでおり、そのまま力を入れれば裾野の手はタンパク質の塊になってしまいそうである。

裾野がどう力を入れようと、どうふんばり方を変えようと、どう力を入れる角度を変えようと、一向に裾野に勝利の兆らしきものは見えない。裾野がばてた所で、ダムが決壊するように力が加えられて、裾野の手は重力の虜となってカウンターに叩きつけられる。

「お客さん……もう二十四回目ですよ？」

「……まだまだあつ。」

「ちよつ……先輩が言わないで下さいっ！」

裾野が悲鳴をあげる。二十四回叩きつけられた腕は真つ赤になっており、肉体的にも精神的にも限界が近いようである。

付近に居る一番近い人と腕相撲して勝つ。という指令だった。この時にこのカラオケに居たのは、この店員と裾野と志奈だけ。必然的にこの男とやりあう羽目になったのである。

「……女の子があんな人に勝てるわけないよ……ふああ……。」

という志奈の現実論兼先輩命令から、裾野がこの下手すればヤクザとも形容できる男と腕相撲をしている次第である。

「せ、先輩ちよつと代わってくださいよ……。」

近くのソファで下手すれば寝てしまいそうな表情で眺めている志奈に、裾野がそう言っただけ。情けなく見えるが、誰だっただけに違いない。

志奈は面倒臭そうに瞼を持ち上げたが、渋々といった感じで言った。

「……ふああ……。仕方ないなあ……。つくし。後で寝かせてね。」

「……マジですか……。……分かりました……。」

ちなみにこれは二十二回目の交渉である。交換条件が少しばかり

眉を顰めるべき節があるが、ここは黙って吞まなければループが終わない。

志奈は相変わらず安定しない足取りで、その店員の方に歩いていく。店員は意外そうな顔をしてから、裾野に皮肉めいた視線を浴びせた。

やっぱりこっちが真打ちか、と。

第十八刊つ！

「ふんぬううううううっ！」

「……。」

「どりやああああううううっ！」

「……。」

静かな店内に、志奈の悲鳴というか、雄叫びもどきが響いている。相手をしている店員の大男は、必死でその大根の様な右腕にくらいついてきている細い腕をげんなりとして眺めている。その細い腕の主である志奈は顔を真っ赤にして、これでもかというくらい力をいれて、その右腕を押し倒そうとしている。しかし、子供が車を押して動かそうとしている様に、その右腕は一寸も動く気配を感じさせない。むしろ、少しでもその右腕が力をいれたら、志奈の腕が変な方向に曲がりそうである。

「に、やああああううううっ！」

助けてくれといわんばかりの店員の目が、近くで眺めている裾野に向けられる。裾野もまた、困ったように視線を返すしかない。なんだか、この男が酷く哀れに見えてきた。

やがて、ぼてーんっと大男の右腕が木こりによって切られた大木のように倒された。

「あ……。」

志奈はぼかんとして、その倒れている腕を眺めていて、店員の顔にはやれやれといったような、苦笑いが浮かべている。ご愁傷様でした。

「……わーいつ、裾野君勝ったよ……。」

志奈はそれから、満面の笑みを裾野に向けてきた。

「……なんというか、いろんな意味で負けましたよ。」

店員はなんだか嬉しそうにそう言う。まあ……一応、志奈も女子高生である。

「とりあえず、ありがとうございました。」

と、裾野は礼を言っ、一番の部屋に戻った。さつき退室したときのままでマイクや、テンションを上げるためのタンバリンなどが散らばっていて、テレビにはいろんな音楽関係の広告が流れている。「はあ……なんとかクリアですね……。」

裾野がため息混じりに、ソファに座り込むと、その隣にすんと志奈が座った。裾野は知らずの内に警戒態勢に入ってしまう。

「……さつき言ったよね。後で寝かせてくれるって……。」

志奈はこれ以上無いくらいとろーんとした声でそう言っ、ぽすんと裾野の胸元に倒れこむ。

「ええ……ちよつとっ！ここはカラオケ屋ですよっ！寝る場所じゃないですよっ！むしろその逆のことをするところですよっ！」

そんな彼女に裾野は、必死に抗議の声を上げるが……、彼女は既に旅立った後。哀れにもその声は夢の中の彼女には届かない。規則正しい寝息が聞こえてくるばかりである。

「ステーキセットとアメリカンドックですーっ。」

と、そんな時に店員がさつき注文した朝食を運びに、部屋に入ってきて……その光景を目の当たりにする。

「あつ、いえっ、これはあなのっ！」

「ははあ……それではごゆっくりい！」

店員はそれだけ言っ、不思議な笑みを浮かべて去っていった。あの笑みは『ニヤニヤ』という表現がぴったりだった。

裾野は嘆息してから、朝食のアメリカンドックに手を伸ばしたが、そうすると志奈の体がバランスを失っ、落っこちそうになった。裾野はそれを慌てて受け止める。

裾野は室内を見渡した。高らかに肉が焼ける音を上上げるステーキと、安らかな寝息をたてる志奈と、それを配慮してその場から動けない裾野がこの部屋に取り残された。腹の音が執拗にそれを食わせると、抗議の声をあげるが、現実がそれを許してくれない。

裾野は、初めておあずけをされた犬の気分を知ることとなった。

「ふあああ……。」

外に出ると、太陽はそこその高さまで上がっており、人もちらほらと姿を見せるようになってきた。あの指令をこういったところで受けた方が良かったのか、カラオケ屋で受け取ったのが正解だったのか、裾野には判断しがたい。

終了十分前に志奈を起こし、それから十分終わるまでで何とか朝食を食べ終えた。志奈の頼んだステーキは、結局大部分が残ってしまったのは仕方ないのであろうか。あの名残惜しそうな顔は、どこか同情の念が湧いてくる。しかし、その十分前までの時間、裾野にとっては途方にも無い苦痛の時間だったりした。際限の無い緊張が連続した時間というのだろうか。ただひたすら時間が経過するのをテレビに流れている広告を見て待っていた裾野であった。

「……………さて次何処行こうかー？つくし。」

「そうですね…………。」

裾野はそろそろ他の組と合流したいのだが、外の世界というのは面積が広い。学校の外というのが、どのくらいの範囲での言葉だったのか、裾野には想像もつかない。あの部長であるから。

「……………指示はどうなってるの…………？」

「まだですね。」

「へあ……………つくし。」

そんな会話を丁度交わしたとき、偶然というか、何かが起こった。「第一村人はつけーんっ。」

「おやおやこれは、楽しそうで何よりです。」

美野里と矢部が現れた。美野里は矢部の腕に抱きついていて、その矢部は穏やかな表情をしている。隣の志奈の顔は相変わらず眠そうである。もうこの光景は日常茶飯事なのだろうか。

「……………あ、部長さん…………。」

「んーっ、スライムなんか嬉しそうね。もしかして、もう寝ちゃった？」

「……はいー、今までで最高級の至福の時間でしたー。……つくし
つ。」

美野里は、志奈とそんな会話を交わして、やがて裾野の方にも向
き直った。

「そんじゃあ、ジャンケンして。」

「え、あ、はい……。」

裾野はそういわれて、志奈に視線を移すと……既に戦闘態勢に入
っていた。

「じゃーんけーんっ」

「……ほい。」

志奈がグーで、裾野がパー。裾野の勝ちである。

「ああ……負けちゃった。」

えへへといった感じで、志奈が呟く。

「負け組はこっちよっ！」

と、なんだか嫌な表現で叫ぶ美野里の声が聞こえてきた。どうや
ら、今度は矢部と行動らしい。

「次は裾野さんですか。よろしくお願いします。」

そう言いながら、矢部が話し掛けてきた。美野里は超強引に、志
奈の腕を引っ張って行ってしまっていて、既にこの場に居ない。

「あ、こちらこそよろしく願います。」

第十九刊つ！

「お、指令ですか。」

「みたいですネ。」

矢部がそう言つて、裾野が頷く。

美野里たちと別れてそうしないうちに、裾野の鞆で眠っている指令フォルダーが振動しだした。携帯のバイブレーション機能を更に増幅させたような、頭をその上に置いたら二十秒ほどで嘔吐を感じそうなくらい激しい揺れである。気づけないはずが無い。

「……あれ、矢部先輩はこれ持つてないんですか。」

「ええ、部長が持つてましてね。通常一組に一台みたいです。」

「はあ……それじゃ両方持つてないケースが出てくるんじゃないですか？」

「そういうケースが発生するときは、必ず一つの組が二台持つていることになりますから、そこから受け取ればいいとのことですよ。」

「え、……でももしたらこなした指令の数が分なくなるんじゃない

……？」

「……なるほど……そりゃ、気づきませんよね。」

「え？」

「いえ、なんでもないです。指令はどうなってますか？」

「あ、はい、ちよつと待つてください……えつと……。」

裾野はそう言われて、慌てて鞆からフォルダーを引っ張り出して、そこからファックスの様に出てくる紙を確認した。

『押しボタン式信号のボタンを三箇所を押せ』

「ああ、あの歩行者用ですか。なるほど。」

矢部が裾野の持つているそれを横から覗き込んで、感心したように声をあげた。裾野はその矢部の顔を見上げて、訊ねる。

「心辺りはありますか？」

裾野はこの辺の地理については詳しくない。ここは素直に頼らせ

てもらうことにした。

「丁度この付近に三つありますね。二つはここから確認できて、一つは少し離れた場所にありますが、歩けない距離ではないですね。」

「おお……」

矢部は少し考えた後、そう言った。流石だ、と裾野は感嘆してしまふ。

それから、少なくともさっきの腕相撲よりは難易度は低いのを実感して、裾野は安堵した。ひねくれた指令だけではないようだ。

「では行きましようか。図書券が待ってますよ。」

「あ、やっぱり欲しいんですか。」

「手に入るものなら手に入れなければ損ですから。」

そう言って、歩き出す。

矢部はかなりの長身の持ち主で、バスケットボール部のキャプテンといっても誰も疑問を抱かないような体格の持ち主である。顔は裾野の容姿に関する褒め言葉の限りを尽くしても、全てに当てはまる。いわゆる、イケメンである。その繊細な顔に浮かべる笑みは、プリンの上にかけるキャラメルソースの様な甘さである。

「まず一つめがここですね。」

と、矢部がそう言って、押しボタンを押す。

そこは、そこそこの交通量を誇る道路に作られており、悪戯で押すとそこそこの被害が出る。渡りこすすれば、咎められたりはしないものの、裾野は罪悪感を覚えてしょうがない。

その信号を渡って、しばらくその道に沿っていくと、またもう一つの信号が見えてきた。矢部の言っていたことは本当のようだ。

「次で最後ですね。少し歩きますよ。」

「少し……ですか。」

「少しです。一キロほどでしょうか？」

確かにフルマラソン単位で見ると少しだな、と裾野は思っただけで気づかないようにため息をついた。

第二十刊ッ！

「こつちでいいんですか？」

裾野は辺りを見渡しながら隣に歩いている矢部に尋ねた。なんだかあたりの光景が住宅街に移りつつある。確かに、こんなところに一本だけぴゅーんと伸びている道路があれば、押しボタン信号がありそうな雰囲気ではあるが、どことなく不安を覚えてしまう。

「記憶に濁りが無ければ、こちらで大丈夫ですよ」

矢部が何気に自信ありげに言う。この人が自信を持っていつているのであれば、間違いは無いだろう。

「……それで、あそこでこそそついてきている人は誰だか知ってますか？」

裾野は後ろをちらちら見ながら矢部に訊いた。さつきから後ろに妙な人影がある。気になるというか、その不自然さに恐怖を感じる。

「説明がまだでしたね。あの人たちは部長の差し金ですよ」

「さ、差し金ですか。」

「使用人、ですかね。ああ見えても一応いいところのお嬢様なんですよ。どこでどう人格のネジが緩んでしまったのかは永遠の謎ですがね。」

「へえ……」

ふと、裾野は例の部長の顔を想像してみるものの……そんなイメージは沸かなかった。どこかの家に居候している、と言われても納得できてしまいそうだが、どこかの家のお嬢様と言われて納得する者は皆無に近いだろう。

「そんで……その部長さんの使用人さんがどうしてここに？」

「察するところ、そのフォルダーの管理をしているのは彼らでしょうね。見張って、担当している組が指令を達成したら少しのタイムラグをおいて次の指令を発行する。」

「はあ……それは随分とご苦勞なことですね。」

裾野は肩をがつぐりとおとして言った。そんな裾野を見て、矢部がほくそえむ。

「まあ、こんなのは良いほうでしょう。NASAを買い取れとか、駄々をこねていたときもありましたからね。」

「えっ、マジすかつ？」

「もちろん冗談ですよ。でも石油油田の所有権が欲しいとぼやいていたのは本当です。」

「……スケールが違いますね。」

「実行しなかっただけ良かったでしょうね。そういう大きいことになれば、基本的にあの人は有言実行ですから。」

矢部は苦笑しながらそう言つと、角を曲がるように裾野を促した。その曲がった先に広がっているのは、今まで通ってきた道を更に閑散とさせたような道。それでも構わず矢部は歩きつづける。

「……しかし、うちの部員と初めて会ったときの貴方の反応は面白かったですね。」

「忘れてください。」

裾野は即、そう答えを返す。というか、あれで驚くなという方が無理な話なのである。個性的にも限度というものがある筈だ。リミットを無視しているのか、あるいは元々無いのか……。

「特に富樫とがしの時は凄かったですね。……ほら、部長がトラと呼んだあの人ですよ。」

「ああ……あの……」

裾野はあの時のことを思い出して……げんなりとする。

女子が男言葉というのはどうかと思うが、それは勝手な見であつて、小説とかでは結構そういうキャラは多いし、接してみれば意外と女の子らしい面もあるのであろう。裾野はそう噛み砕いて、呑み込む。

「先入観が確固すると、なかなか他の方面からの判断がし難くなるのが人間ですからね。」

裾野の胸の内を呼んだかのように、矢部がそう笑顔で付け加えて

くる。というか、噛み砕く前の裾野の考えを否定している。

「まあ……いずれ話すでしょうから、今話しておきますか。どうせ暇ですしね。」

「……何がですか？」

矢部が不意にそう呟いたので、裾野はふいと矢部の目線一つ分ほど高い横顔を見た。

「彼女は元々男だったらしいですよ。」

「へ？」

そして、矢部が当たり前のようにそう言ったので、裾野は裾野で返答に困る。

「劇的ですね。その顔です。」

「楽しんでないで続きをお願いします。豚汁を具だけ貰ったような気分で後味が悪いです。」

「そうですね。何でも彼女……彼でもどっちでもいいですが、ご両親がですね、女の子が欲しかったんですが男の子が生まれてしまったそうです。それで考えあぐねたご両親は、こつこつを貯金を貯めて彼が十三歳になった夏、寝ているところを拉致して、性転換手術をしたそうです。」

「……すいません、解説を……。」

「実話ですよ？」

「……どうしても誰かの意図のようなものを感じるんですが………」

「何かの意図があったとしても、我々にはどうしようも無いことですよ。」

「はあ……って……。先輩……。」

裾野は立ち止まって、矢部に呼びかけた。矢部も立ち止まって、裾野を見た。

「どうしました？」

閑静な住宅街である。前も後ろも右も、どの方向を向いても住宅街である。ちなみに左は田んぼが広がっている。

そんな中、裾野は上を見ながら呟いた。

「……ここ市境ですよ？範囲は市内なんじゃないですか？」

「……だしたら」

矢部は困ったような笑みを浮かべた。獲物を見つけた鷺を連想させる笑みである。

「迷っちゃったみたいですね。」

第二十一刊っ！

「参りましたねえ。本当に参りました。」

矢部はそんな風に言つて、さつきからしきりにきよきよと周囲を見渡している。市外に出てはいけないという規定は無かつたはずだが、矢部によれば部長がそれはできればヤメテホシイと言つていたと言つので、市境を踏み越すことはしなかつた。……作意を感じたが、素通りすることにする。

「……どうすんですか。完全に未踏の領域に踏み込んだみたいですよ、俺達。」

裾野はげんなりと肩を落として呟くように矢部に話し掛ける。参つたとしきりに言っている割には、たいして危機感を感じて居なさそうな表情をしている。それを見て裾野の表情は更に落胆の色を深める。

「もしかして常習犯ですか？」

「常習犯なんて人聞きの悪い。方向音痴とでもいいいますか。」

「じゃあなんであんなに自身満々だったんですかつ！」

「ここにはかれこれ十年ほど住んでいるんですよ？もはや自分の庭のようなものですから。」

「自分の庭で迷うんですか……」

「手入れを怠つてましたからね……。」

無意味な会話を繰り返すのに徒労感を感じた裾野は、とりあえず方向が分かりそうなものを探す。

「太陽つて東から昇るんでしたっけ。」

「西ですよ。」

「……嘘ですね。東でしたよ絶対。」

「方向が分かつたところで状況は大して変わりませんよ。この辺は入り組んでいますからね。直進は不可能に近く、遠回りに行こうとしても結局泥沼ですからね。僕が言つんだから多分相違ないはずですよ。」

「……マジすか。」

今の状況に陥ってしまった根本的な原因を思い出してみると、その相違ないは負の意味での相違ないに聞こえるのだが、指摘したところで状況が変わるわけでもなし、エネルギーの無駄なので裾野は口を噤んでおく。

しかし、泥沼にはまったとき、足をじたばたさせると逆にどんどんはまっていくように、歩けば歩くほどどこまでもループの渦の奥深くにはまっていくような気がする。

裾野は、この街の地理に関して、海無し国の人が知っている海の知識ほどこしか持っていないく、ましてやそんな入り組んだ場所にそんな寝起きの人の体内時計並に信用できない裾野の勘をつかえるはずもない。必然的に、この辺りの地理を網羅しているという矢部についていくほか無い。携帯は持っているものの、ナビ機能なんて豪華なものはない。

いい加減疲れてきた。なんだか、眩暈がする。早朝に起こされたことによる睡眠不足が原因だろうか。

「……そろそろでしょうか。」

裾野の足が動くブリキと化してきた時、矢部がそう口を開いた。

裾野はがくと立ち止まる。

「な、何がですか。」

「応援……というか、救助隊です。」

「……はあ……」

どうやら矢部は自分の方向音痴を認めたらしい。裾野はその発言からそんな風に感じ取った。

やがて、後方から声がした。なんかさっきも聞いたような声だ。活発というか、騒音というか、そんなハイテンションな声。

「いたーっ！ヤベっち！」

部長の美野里^{みのり}だった。エコバッグと酷似した鞆を振り回しながら、こちらに駆けてくる。脚にブリキという葛藤を抱えた身である裾野

にとって、その光景は満腹時に大食い芸人が大食いしているところを見るような、そんな上腹の辺りに不快感を覚える光景である。

「ふああああ……ま、待ってください……もつとゆっくり……」

……
そんな、鬼畜ハイテンションの部長に手を取られて、強制的に走らされている人物はというと、さっきまで裾野と行動していた志奈^{しな}だった。さっきと変わらぬ半開きの目で、必死に脚を動かしている。裾野はその光景を見て、心底同情する。

「尾行部隊の人が、我々が遭難したことを彼女に伝えてくれたんですよ。……いつもそうだから、なんとなく感覚で覚えてきてしまうものなのですよ。」

「……………はあ。」

矢部の意味不明な弁明を、裾野は適当に相槌をして流す。

いきなり襟首を思いつきり引つ張られて、呼吸ができなくなった。

「さあっ行くわよおっ！」

なんとか後ろを振り向くと、美野里が裾野の襟を右手の二本指で抑えていた。

美野里と一緒に行くのはこの場合当然である。ダブりの無いように……との話だったから、さっきまで一緒に居た志奈とまた行動することは許されない。

というわけで、裾野は美野里と一緒に行くことになるのだ。

しかし、このあっけなさは何なのだろうか。……展開が急すぎて、裾野の脳では処理しきれない。

「……先輩……分かりましたから、とりあえず放してくれます？」

「へ？あ、ああ……………」

とりあえず、その襟首を握っている指を取り除いた。

第二十二刊っ！

ようやく人気が見えてきた。派手に行き交う車に、ちらほらとせかせかと歩く人の姿が。砂漠で散々彷徨った拳句、地下帝国を見つけた気分である。

「ヤベっちはそういうところは酷く疎いからねー。注意するの忘れてた。」

美野里は白い歯を見せてはに cand。

裾野と同じくらいの身長ではあるが、遠くから見るとそんな風には見えない、ほっそりとした体躯の持ち主である。肩までかかる髪の毛先を、適当に結いでいる。どちらかというとその様は、容姿に關しては無関心の様に見える。そして、その見るからに活発そうな線の細い顔。下手すると裾野より年下に見えてしまいうくらい童顔である。性格に關してははかりしれないが。

「あつたあつた、あれね。」

美野里がそう声をあげた。裾野達の前方には、『押しボタン式』と、書かれた青い看板。一時間ほど前に見つけていたはずの信号がそこにあつた。時間によって通行量が違うその交差点もどきの通行を、歩行者の手によってうまく処理している。

「大丈夫よー、そんな必死にならなかつて。皆そこそこ頑張つてるみたいだけど、随分てこずつてるみたいよ。こんなの簡単なほう多分。」

「……はあ。最後の一言が無ければスッキリとした気分になれたかもしれない。」

裾野はどこかトチ狂った焦燥感を脳の隅に追いやり、その押しボタン式信号の、『歩行者用ボタン』を押す。悪意はないが、一応悪戯である。どこか罪悪感を感じる。

「さあて、次行きましょ、次。」

裾野が押した瞬間、美野里がそう声を張り上げた。ぐてっと、裾

野の渡ろうとした足が根元から歪む。

「……渡らないんですか？」

「なんで渡るのよ。」

しれつとして美野里が言う。やはり、この人は露骨に変なところを強調したがる性質らしい。

「……悪いじゃないですか。わざわざ止まってくださるドライバーの皆さんに。」

「何言ってるのよつ。この交通社会で一番優遇されるのは己の力を以って移動する歩行者であって、機械とかいう小細工を利用して移動する輩はこの程度のことです。怒ってはいけませんのよ。それで怒るなんて理不尽極まりないわよ。私がこの制度を作った人間なら、文句を言った時点で免停にするわね。」

「……分かりました、つまり乗り物恐怖症なんですね。それとも、単なる屁理屈でしょうか」

「……なかなか良いセンスしてるじゃないの。」

なんというか、裾野は自分の周りに一般常識を網羅している人間がいないのであれば、自分がひたすら突っ込みに徹するしかないように感じるのだ。真面目に突っ込んでいっても、大して効果があげられないような気がする（というか、確定事項だが）ので、こうして皮肉めいた突っ込みになってしまふ。だが、裾野がそれを訂正する必要を感じないほど、歪んでいるのだ。

「……金持ちというのは本当なんですか？」

裾野はそんな思考のなか、ふと思いたったことを訊いてみる。

部長がおかしいことは、彼女が崇拜する矢部公認（全力バックアップ付き）である。

それを聞いた美野里は、少し声を落としていった。

「……ヤベっちゃん？」

「……はい。」

裾野がそんな豹変に戦慄を覚えながら、そう答えると美野里はふと表情を和らげた。否、いつもの表情に戻した。

そして、おどけた様子を見せて（いるらしいが、いつもと変わらない）、

「随分と親しくなったみたいね。」

「は？」

「いやね。ヤベっちは親しくない人にそんなこと話したりはしないからね。私の個人情報とかプライバシーとか。」

「……怒ってるんですか？」

「ううん。いや、うん。いや、怒ってない。うん。むしろ嬉しかったり？」

「……はあ……。」

「まあ、どのみち知ることになったんでしょうけどね。ヤベっちと一緒に庭で迷ったりすれば。」

第二十三刊っ！

「なんでこの指示の発行に、こんなにタイムラグが起こるんですか。」

「うん？ そりゃあ、あの（後ろの）人たちも超人じゃないからね。」

「……なるほど」

「……なんか不満そうね。」

「そんなことないですよ。その腕をどかしてくれれば。」

「あらん、これは親睦を深めるための一種の常套手段よ」

「……この部活、抱きつき癖の人が多いですね」

裾野はそう呪詛の様に呟いて、左腕にしがみつくように抱きついている美野里を半眼でみやる。いつでだってそうなのだろうが、遠足の真っ最中の幼稚園児の様な、そんなうきうきした表情でいる。ここまで無邪気だと（天然とはまた違う）、今の自分に疑問を感じてしまう。

この人の後輩なんだ、と。

二人が歩いているのは、郊外の商店街。もどき。市から正式な商店街という名目を与えられたわけではないが、システムというか形状が商店街に匹敵するので、市民からは商店街として親しまれている。らしい。裾野はこの場所の存在を知らなかった。美野里から聞いて（&連行されて）初めて知ったのである。

知らなかったのは入学式から今日に至るまで、ろくにこの辺りを探索する機会がなかっただけである。なんか入部するまでの期間が濃厚だったような気がする。

この商店街もどきは、ほとんどが私営の店ばかりで、もはや見かける機会の少なくなつた八百屋や魚屋といった、懐かしさを感じさせる店が建ち並んでいる。さながらプチ昭和気分である。

それでもって、美野里はこの常連なのか、この風体を見た店の

人たちから野次を飛ばされている。

「おっ！美野里ちゃん！ニュー恋人かいっ！」

だとか

「これまた良い男見つけたねえ！」

だとか

「また騙されないようにね！」

だとか

「切れたらまた俺と付き合ってくれえっ！」

だとか、想像力を彷彿させるようなセリフが多い。

「違うつてばっ！後輩だつてばっ！」

と、美野里があははと笑いながら、返事を返している。が、セリフとは裏腹にその笑顔は冗談じみていない。恋人が居ることを隠していたキザ男がその存在を友人にばれた時の、「参ったなあ、ばれちゃったかあ」と、腕に恋人の腕を絡めさせて頭をぼりぼり掻きながら言った、てれるような笑い。『ニヤけ』に分類される類の笑みである。

「……満更でもなさそうですね」

裾野がある程度の皮肉を込めて、そう言つと美野里は表情を変えずにしれつとして言った。

「何言つてるのよ。あれはコミニケーションのひとつよ。誰も本気だなんて思っちゃ居ないわよ。」

裾野はその言葉に、言葉にできない凄まじい引つ掛かりを感じた。「お前頭いいなあ、俺なんかと違つてさ」と、言われたときの様な漠然とした不快感というか、暗喩的な何か。

「いただただ……何よ、鞆に入れてるなら入れてるっていいなさいよね……」

「……この大きさのものがポケットに入るとでも思いますか……」。裾野は例によつて、上に鼠を載せておいたらそのまま死んでしまふんじゃないかというくらい、強烈な振動を感じて、鞆から例のフォルダを取り出す。ようやく三枚目である。

『次のペアが見つかるまで互いの手をガッチリ握りあい、互いの一人称を交換する』

「すみません、棄権していいですか。」

その指令を見た裾野は間髪を居れずにそうやって言った。こんな会話に干渉する指令があるなんて聞いていない。それに手をガッチリ握り合うなんて……同姓でも異性でもしにくいことこの上なし。

ましてや、この野次が平気で飛び交うこの戦場の最中である。戦場へ向かう輸送機の中で、寝返ったといって、武装解除するくらい無謀というか、愚の最先端をゆく行為である。

「ふふふ……こういうノリを追及するのを待ってたのよ。」

しかも、隣でそんな声をあげる人が居る。ノリの権化とも取れる。裾野の掌は既に、体外から来る体温を感じていて、自分が発しているものではない運動エネルギーによって、手が引っ張られている。ちなみに、これが裾野が初めて異性（妹を除く）と手を握った瞬間であり、またその相手が部長である。

本当にこの活動は、文芸部の活動なのだろうか。

第二十四刊っ！

「いいじゃないの、男は。『私』とか使ってもおかしくないでしょっ」

「んでも使い慣れてないのだと……」

「『俺』だなんて、俺達には一生縁が無いと考えてもいいのよっ！ そんなしよげてないで、さっさと次のパーティを探すわよっ！」
「いだだだっ！ 結局、部長も早く解放されたいんじゃないですかっ！」

「なあに言ってるの！ これは指令なのよっ！ さっさと達成するに限るわっ！」

「わわわわわかりましたから、手を放してくださいっ！」

「これが指令でしょ。」

「両手とは書いてないですっ！ あと、そんな強くとも命令されてないですうっ！ あと走れとも命令されてないですよっ！」

そう言うと、パツと片手を離された。血の流れが止まっていたのか、心なしかその手は白くなっているような気がする。

ついでに走っていた足もゆっくりになったので、裾野はほっとして美野里の隣についた。

「……」

「……？」

ついでに、美野里もだんまり。

裾野はその劇的な変化に疑問を抱き、その流れていく道路を見ている顔を覗き込んでみると……見事にふくれつつらをしていた。

「……どうしたんですか。急に黙り込んで。」

「……俺が商店街にあんたを連れて行った理由、分かる？」

一応命令は守っている。ちなみに裾野は遭遇するまで一人称を使うつもりは無い。

裾野が首をひねっていると、美野里はその裾野の横顔を見た。

「自慢するためよ。」

「じ、自慢？」

「そう。自慢。」

「な、何のですか。あの時訊いたら冗談だって……」

裾野はそこで言うのを止めた。なんというか……美野里がもじもじしている。こんな姿を見るのは初めて……というか、することができるとは思わなかった。

足まで止めてそんな様子を見せている美野里に、裾野はどうするべきか悩んだ挙句、あちらが開口するまで黙っていることにした。

「……だってあんたは……」

沈黙の末、美野里がそう言っただけ口火を切った。

そこまで言うてから、裾野の顔を真正面から捉えた。

「初めてヤベっちが真心から褒めた奴だものっ！」

「……初めて？」

「そうよ。この二年間で初めて。これはすごいことなのよ？分かる？ノーベル賞を一生で五度くらい受賞するくらいすごいことなのよ？」

「……喻えのスケールが大きすぎてなんとも……」

「だからね、あんたはもしもヤベっちに何かよくないことが起こって、わた……俺と結婚できなくなってしまったときに結婚する相手っ！わかるっ？」

「ごめんなさいわかりません。」

一回噛んだのはしょうがないこととしよう。

「だから……あんたは準嫁なの。」

「…………表現がちよいと……。」

「……だからちよいと接してみたら、ヤベっちが言っただことの意味がわかったような気がする。」

「え？ はっ！？ ぐはっ！」

美野里の言う意味が分からず、思わず一文字で言い返した瞬間、首に圧力を感じた。

「甘い新参。」

「……こんにちは……黒形先輩。」
くろがた

裾野がそううめくように言つと、黒形はすつと首に回していた腕を解放した。

「んだ、またお前か。」

「……………またお前か。」

小森がその後ろからひよいと現れる。お互いそんな感想しか浮かばない間柄なのである。

「先手必勝おっ！」

調子はどうだ？と訊こうとした裾野の右頬に綺麗な軌道を描いたストリートが入った。視界がペンチで押しつぶしたように歪む。そんでもって、アスファルトの道路にしりもちをついてしまう。情けない。

「なっ、何するんすか！」

「先手必勝って言ったでしょ。私の勝ち。」

美野里がそう言つてガッツポーズを取る。

「じゃ、ジャンケンでしょっ！ジャンケンっ！」

「ジャンケンばかりじゃつまらないわよ。」

そんな会話を聞いていた黒形達も。

「蝙蝠。確かにじゃんけんと呼ばれるものじゃつまらない。ここは」
こつもじ

一つ、影踏みで勝負を決めないか？」

「おうつ望むところっスよ！」

か、影踏み？と絶句する裾野を尻目に、二人は影踏みを開始する。

呆然とその凄まじい攻防に見入ってしまったいた裾野だったが、美野里に耳を引っ張られて我に返る。

「いった！な、なにするんですかっ！」

「さっき私が言ったこと、忘れてよね。」

第二十五刊っ！（前書き）

テスト期間なので、23日まで更新を停止しますorz

第二十五刊っ！

影踏みでは、小森が劇的な勝利を収めて結局裾野は黒形と共に行動することになった。一回紙刀で脳天を力チ割られそうになった間柄、裾野は酷く緊張している。数分前も出会い頭にみね射ちを食らったし。

しかしこの方、客観的に見ると、忍者オタクにしか見えない。

黒装飾といい、頭に巻かれた黒い布といい、腰に刺さった紙製の刀といい、意味ありげに手からぶら下がっている巾着袋といい。一応、今日は部活動として招集されたわけだから、当然学校の制服で来なくてはならないのだが、何故か今、黒形はその格好をしている。

「……しかし意外だな。貴様が部長殿の手を取るとは。」

黒形がいきなりそんな風に開口した。

「別にさした意味はありませんよ……。あれは指令です。」

「しかしあんなに親しげにがっちり握っていたのだぞ。指令とはいえ、そこまでするとは我にはとても想像できん。」

「いえ、がっちりも指令です。」

「……指まで絡ませているのだぞ？」

「指令です。」

実のところ、裾野の思考はもつと別の方向に向いていた。話題にも持ち上がっている、指令のことである。なんだかろくなものが出ないような気がする。

「……しかも、この忍者とである。不安に思わないほうがよっぽど不安である。」

「……何を物思いに耽っている。まさか本当に」

「違いますから安心してください」

怪訝そうに動いた黒形の視線を裾野は一言で斬り捨てる。会話に発展させるとちよいと面倒になりそうである。

「……。」

答えが得られなかったからか、黒形は不機嫌そうに目を眇めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9726e/>

今日の文芸便り

2010年10月11日20時17分発行